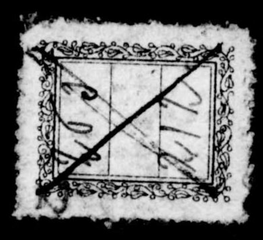

特103
351

帝國圖書館藏

長與善郎著

# 求むる心

東京
洛陽堂

大正
5. 7. 12
内交

此書をわが忘れ得ざる最愛の亡父
長與專齋の靈前に捧ぐ

# 序

此本には雜誌「白樺」「エゴ」及び「科學と文藝」に現はれた自分の感想、脚本、對話、及び詩を集めた。古いものも最近のものもある。猶ほ一番終りに附けた小論「國粹と云ふことに就いて」はつい此間讀賣新聞に載せたもので、頁數の都合で附け加へる事にした。

猶ほ此外に出していゝと思ふものもない事はなかつたけれど、矢張り頁數等の都合で今度は僅かしか出す事が出來なかつた。

しかし自分は此書によつて自分の特色と傾向とが餘程はつきり紹介されたと思つてゐる。自分の中にあるいろ〳〵の方面と要求とは此書中のいろ〳〵の作の中に現はれてゐる。そしてそれが未來に於ける自分を豫告してゐると思ふ。

本を出すに際して自分は毎も謙遜な心持と共にある、傲慢な自信を意識的に持つ事を強ゐられる。自分は西洋の尊敬する人々の事を思ひ、又世の中のいろ〳〵の事を思つて自分の仕事の小さい事、力ない事に今更の羞恥を感じない譯には行かないが、同時に日本のかゝる社會に於ては謙遜は自分にとつて禁物である事、する必要のない事、又してもゐられない事を思ふからである。そして本の出版は自分に勇氣を刺戟する。

此書中の作は多くは皆一度雜誌に載つたものに多少の訂正を加へてある。脚本「畫家と其弟子」の如きは終りの方の大部分を筋を變へない範圍で直した。猶ほ「二週間」は「盲目の川」の附錄のやうなものとして見てほしい。少し氣がひける處もあるけれど出す事にした。

大正五年六月二十八日

著者



# 吾々の藝術

（此感想は半ばより後が中心となつてゐる。なるべく終り迄讀むでほしい）

小さな宗教家になるよりも大きな藝術家になつた方がいゝ。さうには違いない。親鸞や日蓮になるよりも、又二宮尊德や中江藤樹になるよりもシェークスピアやルーベンスになつた方がいゝ。

他國に入つては匹夫に等しい一國の王にはなり度くない。狹い國境の中でのみ奉られる豫言者、一地方の聖人、村夫子、一町内の君子……凡てそんなものにはなり度くない。なつてゐられないことは勿論だが。何しろ小さくては仕方がない。

素より小さな善人になることを恐れて小さな善事を顧みないのはよくない。むしろそれは一つの惡業だ。自己の力に對する要心深い意識の爲めに止むを得ず小事を顧みないのと、唯興味で無頓著なのとは違ふことは云ふ迄もない。善人であることが必要だ。善人であれば小善或は眼先の善を止むを得ず閑却することにある苦痛が伴ふ。そしてその苦痛と涙とが彼の大善に向ふ勇氣を刺戟して奮い起させる一の動機になる。かくして內から驅られ驅られて次第に大善に近づく人間こそ大きな善人になり得る。小善に對する止むを得ない閑却に苦痛を感ぜずに大善は獲られない。涙の溪を幾度か越えずして愛は鍛えられることが出來ない。そしてその大善は更にそれ以上の大善の爲めに惱むのだ。然し其間に彼の力は段々增えて行く。鍛えられ、强くなつて行く。

舊道德に反抗することが無道德になることを意味しないのと同じやうに、僞善者になるなと云ふことは惡人になれと云ふことではない。分りきつたことだが。

眞に大きなものは凡ていゝ。凡て美しい。大きなものは凡て皆大きな本物だから。し



かし本物は必ずしも皆大きくはない。小さな本物もある。「あれは本物は本物だ。しかし大きさは足りない。」かう云はれる人は單に善良な人のやうにわりにゐないことはないい。そしてその大きさを定めるものは其人の力だ。天才だ。かゝる天才を吾々は尊敬することが出來る。天才でない本物では始まらない。

本物は凡て確かだ。しつかりしてゐる。吾々は彼の差し伸ばす一本の枝、一歩の運びが如何に尤もで安全な自然から來てゐるかを一見して覺ることが出來る。如何にそれが必然であるかを感じることが容易に出來る。そこで本物でないものと違ふ。しかし天才は確かであつて而も大きい。力强い。彼は內から自然に發する恐ろしい水量によつてあらゆるものを押し流して行く。ルーベンスや、シェークスピアのものを見る先づ此豐富な水量に驚かされる。押し流して行く力に驚く。其處には大河のやうな重さと、量と、美しさとがある。

かと云つて天才はその力と大きさとを恃んで微細な自然や、確かさを氣にしないか

と云ふに其反對であることは云ふ迄もない。天才であればある程彌が上に確かさを氣にする。自然の微妙さを注意する。彼はガサツと不確かさとを以て生長することが出來ないことを誰よりもよく知つてゐる。さうしてさう云ふ藝術的罪から來る不安に最も神經質に惱まされるものだ。

彼等の力は自ら必然の道を切り開いて進む。彼等の水量は飽く迄も安全で自然な地盤の上を流れる。自然に流れて行く處に正しい運命を見出す。彼は力に於て凡人に優るやうに、それ丈け良心の鋭さに於て、愛に於て、凡人に優つてゐる。彼に與へられてある凡ての力、凡ての才能、凡ての水量は皆彼の非凡に透明な良心、愛を透して流れ出る。彼の内の深き自然、眞實を透して流れ出る。

さうだ。彼の力は彼等の眞實性から發するとも云へる。それは自然から出る自然だ。眞實でない處からは力は出ない。力は不自然からは發しない。自然は動かせない。しかし不自然から出るものは無理になる。無理は動く。何故なればそれは元と〳〵拵え



ものだから。自然に根を張つてゐないから。無理はどうしてもいじける。如何に虚勢を張つて見ても矢張りいじける。根が自然と有機的に交渉してゐない木は如何に枝葉をのさばらしたとしてもその枝葉は枯れてゐる。死んでゐる。根が自然と交渉して自然によつて生きてゐる木は小さくとも活き〳〵としてゐる。有機的な木が大地から自由に吸い取つて出す處のものを枯木は何によつて出すか。それを人間の場合にすれば彼は概念と理屈とから無理に搾り出さなければならない。それ等のものも自然や眞實と有機的に交渉してゐればいゝ。しかし作りものゝ理屈は直ぐ又次の理屈で動かされる。だからそれの足許はふら〳〵してゐる。わきで見てゐても危ぶなつかしい。何となく人形の運動のやうにギゴチない。不自由だ。窮屈だ。延びやうがない。かゝるものは否でも枯れるより仕方かない。

作物を見ればその立ち場が自然にあるか、人工にあるかは一見して分る。先づ感じで分る。よく見てゐれば猶ほ分る。分らないものは多くとも分る人には分る。盲人を

欺くのは未だいゝかも知れない。しかし眞に分る眼あきの眼を欺かうとするやうになつてはお仕舞だ。其人は自然を欺くことに等しい。親を欺くことに等しい。かゝる人は親の自然から放逐されてのたれ死をする。

かくて又その自然――內にある自然――の大小が問題になる。それは何と云つても素質だ。「先づ自然に歸れ。そうして其處から再び出直せ。(實は出直せと云ふ必要はないのだが、現代には多くの不自然な概念が一種の傳染病のやうに瀰蔓してゐて自然を愛する者の心を知らず〳〵毒してゐるから云ふのだ。)即ちより深き自己の眞實に歸れ。

歸ることは進む始めだ。先づ歸らざれば汝は一歩も眞に進むことは出來ないであらう。さうして汝は其處から本當に進むことが出來るやうになるであらう。自然は汝の中に盡きざる泉を湧かして呉れるであらう。」

飽く迄もより深き自然に忠實であれ。それは何より大事なことだ。さうしてその先



きは「自然」に任かせろ。それより仕方がない。それから先きは運命だ。

だが自分が今茲で云はうとしたことはそんなことではなかつた。

再び小さな宗教家になるよりも大きな藝術家になつた方がいゝ。しかし大きな藝術家以上のものになれば。そんなものはないか。それは元より藝術と云ふ言葉の意義の取りやうだ。

自分は云ふ。先づ大きな深い愛を持つ人間になることだ。彼の中に藝術家があり、宗教家があり、哲學者がある。非常に高いものに接して吾々は本能的にそれの名義を考えるか。吾々はその現はれ方を見る。しかし現はされたものを何と見るか。現はす人を何と見るか。

それは一切だ。人間だ。Humanityだ。人間が其處迄行き得ることをそれは示す。

吾々はトルストイのやうな人を頭に浮べ、又はその寫眞を見て大藝術家を思ふか。宗教家を思ふか。大思想家を思ふか。

吾々は唯トルストイを見る。吾々は何も部分的に感じない。名義を考えない。唯トルストイを見る。さうして吾々が彼を解し、彼を愛すれば愛する程その沈默の中に一切の彼を感じる。何とも云へないあるものを感じる。

その「あるもの」を感じさせる處のものは彼の藝術か。思想か。愛か。吾々はそれに何と答へることが出來やう。

素より吾々は彼が大藝術家であつたことを疑はない。さうして吾々は彼が大藝術家であつて吳れたことを有り難く思ふ。何故なれば彼の有り難い處は彼の藝術によつて美しく吾々の内に紹介され、又それは彼自身を確かに高めることが出來た一つの偉大なる方便であつたから。吾々は彼の内に大藝術家がゐて吳れたことを人類と共に感謝するものだ。さうして又他の意味で彼が終り迄藝術を捨てず、それを高い目的の爲めに利用したことを吾々は心强く思ふ。

しかしそれは何と云つても彼の一部だ。一つの現はれた。トルストイはもつと大き



い。彼のライフの全部がトルストイだ。彼の藝術、宗教、思想、行爲、生活、それ等のものは皆素より彼のライフから切り離すことは出來ない。さうして吾々はそれ等のものゝ間にはつきり境界を作ることは出來ない。又その必要もない。何故ならばトルストイの本體は何處迄も彼の人間にあり、全人格にあるので、その全人格は彼の全ライフによつて説明することが出來ても、單に藝術家とか、宗教家とか云ふ名義によつては説き明かすことが出來ないからだ。それにしてはそれは餘りに大きい。餘りに複雜だ。餘りに人間だ。

ある意味で云へば彼のライフ全體は一つの偉大な藝術であるとも云へないことはない。又彼のあらゆる思想も、宗教も、日常生活も。事實偉大なる人のライフは凡て美しい。それがどんなに混沌とした苦痛だらけの悲劇であつても矢張り美しい。彼の内の光りが恰度月光が夜のきたない世界をあまねく美しくするやうに、凡ての外觀を輝かして了ふのだ。しかし嚴格の意義に於て彼は何處迄も自己の内の藝術家の王であり、

主であつて、それ自身でもなければ、又その同胞でもない。

「人間は無數の顔を持つてゐる一の怪物である。」ある人がこんなことを云つたやうに記憶する。此面白い言葉は色々の意味で當つてゐる。吾々は實際いろ〳〵の顔を持つてゐる。對手によつて、時と場處とで吾々の顔は違ふ。さうしてある人々は遂に吾々が死ぬ迄吾々のたゞ一面の顔をのみ知つて他の顔を見ることなしに畢る。

又同じやうに吾々は內面に於て幾多の顔を持つてゐる。さうしてある時は藝術家の顔が現はれ、又ある時は宗敎家や、その他美しい顔、醜い顔、いろ〳〵の顔が現はれる。素よりそれは微妙な關係を持つてゐる。さうして吾々の中の藝術家や、宗敎家や、哲學者や、凡人は殆んど吾々の意識に上ることなしに現はれてゐることがある。吾々が宗敎家を出してゐると思ふ時に藝術家が出てゐることもある。詩人が出てゐると思ふ時に哲學者が出てゐることもあり、何うかすると惡魔が出てゐることもある。又一時に澤山のものが出てゐることもある。こともある處ではない、多くの場合はさうだ。



一つの顔のみが現はれてゐることは珍らしい。むしろ皆無かも知れない。

しかし元よりそれは人によつてその中の分子は異なる。藝術家の分子を比較的多く持つてゐる人、宗敎家の分子を多く持つてゐる人等、いろ〳〵ある。さうしてそれが更に又その人の個性によつていろ〳〵に色分けをされる。

彼等は一樣に自己を活かす爲めに藝術の道を取るであらう。さうして取つた結果そこに現はれるものは皆それ〴〵違ふ。

トルストイのやうな人は如何に藝術の道を取つてもその精神は藝術にはなかつた。その動機、その目的は藝術にはなかつた。それは彼の思想にあり、宗敎にあり、而もその思想や、宗敎の源は彼の人道的「愛」にあつた。孔子の所謂「仁」にあつた。藝術は只その愛を表現し、又活かす一のよき方便であり、僕であつたに過ぎない。

併しシェークスピアのやうな人はそれをもつと重く見てゐる。トルストイは藝術によつては活きてゐられなかつた。しかしシェークスピアは藝術によつて活きてゐられ

た。又生きた。

素よりシェークスピアの全部は藝術家ばかりではなかつた。しかしその全部は藝術の中に浸り得るものであつた。さうしてその中に於て最もよく、即ち最も自然に活きたやうに思はれる。彼の全部は藝術に飽和した。トルストイは迚も飽和は出來なかつた。よし彼の一部がそれと融和することが出來ても。

チヽアンや、ルーベンスのやうな人々は皆シェークスピアの同類であつたやうな氣がする。

吾々は彼等を皆天才であると云ふに躊躇しない。シェークスピアの如きは實際天才といふものゝ典型であつたやうに思はれる。

彼等はたしかに能才とは云はれない。それ以上だ。能才であるにしては彼等は餘りに大きい。餘りに力強い。餘りに自由だ。能才は彼等の大きな衣につゝまれて了ふ。



さうして吾々は彼等を尊敬する。彼等は尊敬に値する力と自由と大きさとの資格を備えてゐる人々だ。しかし吾々は彼等の前に跪くことが出來るか？「無くてならぬ唯一のもの」を先づ彼等に求めやうとするか？。

彼等は皆あるものを掴むでゐる。人類的なものを、或る永遠的なものを掴んでゐるとも云へる。さうして彼等は吾々を敎へ、彼等の存在は吾々を喜ばせる。吾々の勇氣を鼓舞する。さうして彼等は吾々を祝福し、吾々は又彼等の存在を祝福する。しかし吾々は眞に生きる爲めに先づ彼等に行くか？。

吾々は何を何處に求むべきか、何は何處に求むべからざるかを知つてゐる。

彼等のことを思ひ、彼等の創造を見て、吾々は素よりトルストイのそれ等に接すると異なつた感じを受ける。さうして藝術と藝術家とが吾々の前に現はれる。其時に吾々はその藝術を讃美する。藝術はいゝな、美しいなと思ふ。さうして吾々が藝術家でもあることを喜ぶ。吾々の内の藝術家は微笑み、勇む。さうしてそれは跪いてかゝる

偉大な先輩の手をとる。

しかし其れと同時に吾々は其時此世界にゐると云ふよりもむしろ藝術の王國にゐると云ふ氣がしないか。天才が王である藝術の國に居ると云ふ氣がしないか。さうして吾々はその王である天才を讃美しないか。天才主義を感じないか。

吾々が藝術の美に恍惚とする時の感情は美しいものだ。そしてかゝる心靈的美酒を吾々に供給し得るものはたゞ天才のみである。勿論その美感にいろ〳〵の種類はある。レムブラントの與へる美感はルーベンスのそれとは全で違ふ。しかしレムブラントを茲に引き出すことは止さう。とにかく天才は尊重すべく敬愛すべきものだ。しかし吾々をして崇拜させるにしてはたゞ天才だけでは足りない。

勿論藝術にしろ、天才にしろ、これ等のことは意義の解釋し方で議論は變るであらう。しかしさう云へば豫言者とか、聖徒とか特に云ふ言葉の必要もなくなるのだ。豫言者や聖人を吾々がさう呼ぶのは彼等が實際さうであるから許りではなく、又此方の



氣持なのだ。吾々はソクラテスやトルストイに唯大天才の名を冠らせて滿足するか。更に基督や釋迦に對して吾々はどう云ふ感情を抱くか。

吾々は藝術をやつてゐる。何故か。云ふ迄もなく吾々が生きる爲めだ。吾々は藝術の爲めに藝術をやつてゐられる程閑人ではない。しかし少くも今の吾々にとつては最も吾々を殘りなく總體的に生かし得る道は藝術を措いて他にないことを吾々は知つてゐる。吾々の中の愛、欲望、矛盾、苦痛、希望、歡喜、悲哀、疑問、不滿等之れ等のものゝ一切はそれによつて訴へることが出來、又それによつて統一的に生かすことが出來る。それでさへ吾々には中々容易なことではない。かくて吾々は次第に吾々の力を養ひ、吾々の根本を鍛え、よき調和に一歩づゝ進むことが出來るのだ。かゝる表現によつて吾々は段々より正直になり、ものゝ眞髓に段々觸れて行くことが出來るやうになる。藝術は吾々にとつて最もよき修養であり、何よりぴつたりした訓練である。さうして吾々の生活の中心は先づ何と云つても吾々自身の修養にある。

吾々は與へ度い。又獲たい。さうしてその兩方の欲望は吾々の製作と表現とによつて最もよく調和する如く思はれる。そしてかゝる仕事が吾々には一番適當である如く思はれる。

吾々は獲るばかりで滿足は出來ない。それにしては吾々は餘りに萬人との交渉を欲してゐる。しかし吾々が與へやうとする瞬間に吾々は自己の所有の不足を思はないことがあらうか。さうして吾々はその嘆きを何處に吐く。製作を外にして。

とにかく吾々は仕事は止めない。仕事を拔きにして吾々の生活は考えることが出來ない。さうして吾々は恐らく一生を通じて此仕事を繼續するであらう。吾々は一生より生きて行かなければならないから。さうして吾々がより生きれば生きる程吾々と萬人との交渉は益々深くなるであらうから。吾々は飽く迄も進んで行かなければならない。さうしてその不斷の仕事は吾々を藝術家としても益々高めずにはおかないであらう。さうして素より吾々はそれを望むものだ。



けれども吾々は知つてゐる。基督には藝術は不必要であつたと云ふことを。トルストイは死ぬ迄藝術を捨てなかつた。彼は死ぬ迄藝術を活かした。そしてそれによつて自己の福音を人々に傳へた。彼には未だ藝術は重寶であつた。便利であつた。さうして吾々はそれを感謝する。けれども彼にもつと以上の權威があつたならば彼は自己の敎えを藝術によつて傳へる必要があつたらうか。トルストイはその爲めに嘆くことがなかつたであらうか。

けれども吾々は幸にして吾々の分を辨へてゐる。吾々は素より藝術を輕蔑する資格を持つてゐない。又意志も持たない。のみならず吾々はそれを否定しては生きることが出來ない。吾々は吾々を活かして吳れる親切な彼女を祝福しやうと思ふ。吾々は彼女によつて人間が何の位迄高くなり得るものかをよく知つてゐる。又何の位に高きものがそれによつて表現され得るかを知つてゐる。

藝術は大きい。それは所謂藝術の爲めの藝術家が解してゐるよりもずつと大きいも

のだ。

吾々は範圍を擴めて自由に物を見やう。吾々にとつて藝術と云ふ概念は不必要な死骸だ。吾々はその死骸に囚はれてゐる必要はない。又暇はない。ある意味に於て藝術は生長したと云へる。それはより人間になつた。よりライフ其物の表現になつた。それは藝術であると同時にエッセンシアルな物となつた。隨つてエッセンシアルなも物亦藝術であり得る。それは藝術でもあり、藝術でもない。それは宗教でも、哲學でも又最高な意義に於ける科學でもある。が、それは何よりもライフだ。人はそれの中に通常以上のライフの權化を見る。エッセンスを見る。何によつて人が生きるかを見る。それは生々しい現實だ。而もそれは藝術なのだ。それはエッセンスであるが故に美しい。ストリンドベルヒの「地獄」の如きはかゝる生長した藝術のよき標本である。

凡てのものが其處で調和する。さうして「聖書」さへ理想的な創作となる。

「吾々も亦聖書を書かなければならない。天上と地界とを結合させる爲めに。」とエマ



ーソンは云つてゐる。さうだ。聖書を書くこと、書けるやうになることは吾々の理想だ。恐ろしい理想だ。しかし何んなことがあらうとも吾々は生きなければならない。然らば吾々は此人生と藝術、否、人生即藝術、藝術即人生の中に於て飽く迄も此恐ろしい理想に向つて突き進まうではないか。自然はそれを吾々に命じてゐるのである。

（一九一五、十二、十）

# 厭世主義に就いて一こと

厭世主義はそれが積極的な意義を持つて來る時確かに最も正しい、最も眞な、且つ最も尊い人生觀(或は世界觀)の一つであることを自分は疑はない。

老、病、死の先天的災厄から脱することの出來ない吾々の生命が更に隨分不完全な、間違いだらけな此の現世の中に住所を得てゐて、其處に如何なる意義に於ても厭世思想が生れないと云ふことは不合理である。そんなことは寧ろ不可能なことである

數千年以前の原始時代から既に此地上にはいろ〳〵な宗教(若しくは迷信)が必要に應じて存在してゐたと云ふ事實を見ても、又それを信ずる者が如何に多かつたと云ふ事實を見ても、人類に厭世思想が早くから附きものであつたと云ふことが解る。人類は



日增しに進化して行つた。文明はある程度迄それの未開的災厄を拂い退けて行つた。從つて厭世主義の內容もいくらか宛進化しては來た。それでも猶ほ厭世主義は依然として人類の上に附き纏つてゐて嘗てそれから離れることがない。

此厭世思想が地上に根を絶やす時が來るか否か。自分は知らない。しかし强ゐて云へば人類が存在する間は、人間がよし病から脱れることが出來ても老と死とからは永久に免れることが出來ないやうにそれは望み得ないことのやうな氣がする。しかし幸に人類は厭世思想にもういゝ加減麻痺してゐる。

ある人々は幸福說を唱へた。快樂主義を唱へた。自分はそれ等の主義の詳しい內容は全で知らない。併しそれが比較的小さな範圍での「諦めの」上に成り立つ思想であつて、それの奥底の前提には矢張り厭世主義が横はつてゐるとしか思へない。如何なる人間にも絶對的な樂觀と云ふことは得られないと思ふ。樂觀は常にある悲觀の上に成り立つ假りの家である。簡單に立てられるのと立てられないのとの相違はあつても。

しかし自分は今此處で厭世主義其物を論じやうとは思はない。又それは自分の力には及ばない。哲學者でない自分は厭世主義の哲學的內容を殆んど知らない。唯自分は人生を厭世的に見ること、觀ずることに就いて今の自分の云い得る丈けの感じを少し云い度いのである。

吾々は元より此暗黑のはびこつてゐる世に生れてそれの隱れもない實在を到る處に見せられる。吾々の外に、又吾々の內に。そして吾々はその暗黑を厭ふ。それの爲めに苦しむ。それからの解脫を願ふ。又それの救濟を欲しる。

暗黑を見てそれを暗黑と思はず、それにおのゝかず、それを厭はず、怖れず、それに苦しまないと云ふことは恥づべきことである。それは自己に愛があると云ふことにはならずに、良心の眠つてゐること、善い神經の無いことを證據立てるからである。自己其物の全部がよし自分には無意識であれ闇に領されてゐることを示すからである。

かゝる人間は不具な人間である。幸福な人間ではない。



かゝる人間は又光明に接しても驚きもせず、悅びもしない不幸な人々である。暗黑に觸れてそれにおのゝき、苦しむ人のみよく光明に接して感謝を感じ法悅を感ずることが出來る。不幸の惱みを知るものゝみよく幸福の悅びを味ふことが出來る。悔い改めるものゝみ救はれることが出來るのと同じである。此の世には暗黑がある。寧ろ此世の大部分はそれに支配されてゐる。そして又自己の內に些かも暗黑の分子を含むでゐないと云ふ完全無缺な人間はかなりに高い人間の場合に於てすらも稀である。そして偉人は常人よりも數倍明かに痛切に人生の暗黑を知り、不幸を知り、無常を知つてそれを厭い、それが爲めに苦しむが故に猶更强く自己の內の暗黑の爲めにおのゝき、惱み、苦しむでゐるのだ。

自分はかゝる世にあつて簡單な肯定を以て滿足し、或は唯盲目の故に樂天家になつてゐられる多くの人々を幸と云つてよいか、不幸と云つてよいか知らない。しかし少くも彼の見解を正しいとは云はれない。彼等の幸福位危く、果敢ないものはない。彼

等は眼の前にある實在を見ないのだ。見ても感じない明き盲目なのだ。しかし彼等はその盲目に正比例した丈けの力しか内に持つてゐない。自分は盲目の爲めに安眠してゐられる彼等の眼の帳を開けてやるのが正當な處置であるか何うか知らない。自分にはそれを開けてやつていゝと云ふ自信がなく、力がないからである。併し彼等の醉眼を蓋つてゐる無智の帳を開けてやることが彼等を唯徒らに戰のかせ、苦しませるのみで彼等に其事を感謝させることが出來まいと云ふことを心配するのは無益かも知れない。何故なら瞼のみを開けても視神經が眠つてゐれば無感覺は同じことだからである。

とにかく簡單な樂天家。魚市に入つて腥きを知らない樂天家。彼等は有害な衆徒でない迄も憐れむべき愚民である。彼等は眞の幸福を知らないのだ。彼等は闇の中に光りを求めやうとしてゐるのだ。

然うだ。彼等も何かの意味に於てある光りを求めやうとはしてゐるのだ。唯彼等は餘りに誤つてゐるのだ。彼等は光りの何處に求むべきか、何うして求むべきかを知らないのだ。實は光の何物なるかをも知らないのだ。併し彼等とても矢張り何かの光りは欲しいのだ。幸福はほしいのだ。罪深い彼等も不幸の前には泣くのだ。苦痛は嫌いなのだ。

盲目な彼等は何處に何うして眞の光りを求むべきかを知らない爲めに彼等の内の簡單な動物慾に驅られてそれを暗黑の中に漁りに行く。物慾の滿足の中に。彼等は樂しみと滿足とは其處にしか獲られないと思つてゐるのだ。そしてそれによつてどんどん罪を生むでゐる。盲目滅法に生むでゐる。そしてその罪の芽はだん〳〵彼等の中に、犯された者の中に育つて行くのだ。それからそれと擴まつて行くのだ。併し其最初の動機は罪惡を造り度いのが目的ではない。此世に惡の苦痛や運命の狂ひを增やし度いのが目的ではない。唯簡單に自己の物慾を滿足せしめ度いのだ。最も低級な幸福、肉の快樂を獲度い爲めなのだ。無智な彼等には一寸先きの運命も分らないのだ。かくて彼等は獸のやうに刹那の中に自己滿足を漁るのである。

彼等は罪に溺れて罪を知らないのだ。よしそれを概念的に知つてもそれの爲めに格別苦しむやうなことはないのだ。「自己」さへ知らない彼等は「他人」を知らず、まして「愛」を知らないのだ。罪人と竝んで釘につけられた時基督は「父よ、彼等を赦し給へ。其の爲す處を知らざるが故なり。」と云つた。全く彼等は知らないのだ。何も解らないのだ。

が、植物が日光を欲する如く人間が幸福を求めるやうに造られてゐなかつたなら此世にはかく厭世主義ははびこらなかつたであらう。人々は賢であれ、愚であれ、善人であれ、惡人であれ、罪人であれ、聖者であれ、元來普ねく幸福を欲してゐるのだ。上は人類的なものから下は利己的なものに到る迄。そして聖賢は餘りに人類を深く愛する處から其愛は慈悲となつて、彼等の幸福の爲めに自己の幸福を犧牲にすることを願ふのだ。其處にのみ彼の眞の、そして唯一の幸福が——彼はそれを願はないが——獲られるからである。其處にのみ自己の存在の欲望と他愛の欲望との眞の調和が獲ら



れるからである。そして此の犧牲的な調和こそは人間の到達し得る最高な調和である。其高い調和の中にあつては自は即ち他であり、他は即ち自である。個體は一切と共鳴する。一になる。

基督や釋迦はかゝる調和を獲た人の中でも最も高い人々に屬する。

人類に幸福を欲する心がなかつたら人類は救はれない。絶對的に緣無き衆生である。唯彼等が容易なことでは引き出すことの出來ない誤謬の中に陷り乍らもそれを何かの意味で欲してゐる處に未だしもの救濟の望みがあるやうに見へる。しかし釋迦でさへも「緣なき衆生は度し難し。」と云つて嘆息してゐるし、基督さへも「耳ありて聞くものは聞くべし。」と嘆げいてゐるのだからそれを思ふと隨分心細い氣はする。

それと云ふのも動物的の利己欲と、靈智的な愛とは全く正反對なものであるから、同じ幸福を欲すると云つても兩者は到底一致しないからであらう。そして救濟の幸福に到るには後者の分子が少しでもなくてはならないのに無緣の衆生は殆んど前者ばか

りでかたまつてゐるからであらう。それがパリサイになつては猶ほ厄介だ。

釋迦や基督の敎への源には素より厭世思想がある。彼等はいと高い處から此世に擴まつてゐる無數の暗黑と不幸とを明かに見たのだ。彼等の明月のやうな澄んだ慈悲の眼の中に此世のあらゆる煩惱と迷ひとに捉はれて苦しむでゐる哀れな人類の姿は手に取るやうに映つたのだ。しかし彼等の敎へは最早厭世主義に止まつてはゐない。それの目的は罪と惡からの解脫である。精進と悔い改めとによる救濟である。愛が大きければさうなることは凡そ自然である。人々に厭世を敎へるだけなら愛がなくても出來る。宗敎はその先きの需用の爲めに生れるのだ。罪を知るに止まる處に未だ宗敎はない。罪から救はれる處に宗敎があるのだ。

自分は愛のない思想や、愛から發しない主義を厭ふものだ。そんなものはいくら論理があつても無い方がいゝ。そしてさう云ふものは人類に用がないから亡びる。世には如何に愛し度くともそれを實現することが餘りに困難な境遇におかれた不幸な人々が



ある。彼等は憎むことが苦痛でも憎まずにはゐられない。併し其處に生れる思想にその寂しさがあり苦悶が現はれてゐるものは矢張りそれに觸れる人にある愛を起させる力を持つてゐる。かゝる人や、その思想は愛すべく同情すべきものである。彼等にも愛はあるのだ。人類はたゞ愛から發した思想や、正しい人間によつて愛され得る主義をのみ必要とする。かゝるものは永存する。假令それが可能であれ不可能であれ、人類の救濟や向上を何かの意味で目的としない、或はそれに少しでも貢獻することのない主義は此世に存在する價値のないものだ。人類の救濟を目的とするものは如何に消極的であり、否定的であらうとも、それは畢竟生產的であると云ふことが出來る。

自分は否定に始まつて否定に畢る純消極的厭世主義乃至虛無主義を厭ふものだ。自分はある場合によしそれに對して同情を持つことが出來ても價値を認めることは出來ない。彼等は唯破壞する許りで其代りになる何等の生命をも打ち立てることをしないからである。否定し度くなくとも否定せずにはゐられずに否定して行く否定には同情

が出來る。その苦痛や深い實感が出てゐる場合には時として尊敬さへする。バイロンの「カイン」を讀んだ時自分は苦しい氣がした。これでは本當に堪らないと思つた。あれを書いてゐるバイロンの苦しい心持に心から同情を捧げることが出來た。その心持が痛ましく、恐ろしい氣がした。そして自分は矢張りある程度の嚴肅な尊敬の念を起すことを禁じられなかつた。(譯のひどく惡いことは隨分生々しく入つて來る感情を妨げたけれども。)あれには實に苦しい眞實が書かれてゐる。眞個く血で書いたものである。それ故に讀む人の心に迸り入つて來る力がある。實感ばかりであるから何と云つても動かせない。しかし自分はあゝ云ふ人生の見方には矢張り反抗せずにはゐられなかつた。自分の實感は未だ乏しくしてバイロンの主觀に對抗し得る力も資格もない。それでも自分は未だ他の見方があることを疑へなかつた。少くも自分にはあゝ厭世的にはなれないと思つた。勿論自分はバイロンとは隨分性質も違い、生い立ちも違い、周圍の境遇も違つてゐる。



しかしもしバイロンの「カイン」に苦痛がなかつたら「カイン」はないのと同じである。「カイン」はバイロンの痛ましい、そして深刻な苦痛から生れた。生れることを强ゐられたものだ。其處に「カイン」の力がある。立派な價値がある。否定は苦痛でなければならない。感情が意志に叛き、意志が感情を制し切れない處から來る止むを得ない呻きであるからそれは苦しい。窒息を逃れる叫びであるからそれは强い。その苦しみがなくて唯否定するのは無意義以上に罪である。罪の深い惡戯である。人生や、人類や、幸福は彼等の否定や破壞によつて破壞はされない。しかしかゝる破壞的厭世主義は此世に害になつても益にはならない。彼等は不幸な愚民をその暗黑から救ふ處か更に永遠に救はれ相もない絶望の深淵に蹴落すものである。彼等は破壞を好むので眞理を愛するのではない。又人間を愛するものでもない。隨つて救はう抔とは夢にも思つてゐない。

吾々はよし此世に生れて此世を厭はうとも、それを厭ふ爲めに生れたものではない。

却つて厭ふべきものを少しでも此世から少くし、或はそれを厭ふべからざるものにし、又は少しでも此暗黒と悲惨との中に、光明を點ぼす爲めに生れて來たと云ふ方が合理的に思へる。惡を見てそれを否定しないのは惡であらう。しかし飽く迄も否定が目的ではない。それは唯幸福の道に到る障害物を取り除く手段である。不幸を除去することは幸福に到る道を開き、惡の否定は善の建設を目的とすることに於て始めて積極的意義があるのだ。道德的存在の價値を得るのだ。

人類が一般に道德的幸福を願ふやうになればよしそれに到達しない迄も大變な大改革であり、大發展である。基督と釋迦と其弟子達とが一時に現はれたことにも優る慶福である。さうなれば人類は隨分完全に近づいたものだ。理想境にめつきり足を進めたものだ。其時には此地上には無論戰爭抔は根絶やしになるであらうし、國家さへなくなるであらう。

吾々は苟もそんなことは到底望み得ないことだ、忘想も甚しいと云つた丈けで簡單



に冷笑して濟ましてはおけるだらうか。全人類の眼が少しでも其方に向けばそれ丈けでも非常なことである。一寸でもそれをその方に向けるやうに吾々はたへず彼等を誘はなければならない。それが凡そ困難な事業であることは解へ、、、、、、るが、吾々はその光榮ある苦しい偉業に對して無責任にしてゐる譯には行かない。冷淡にしてはゐられない。

未だ〳〵此世には厭世主義がはびこるであらう。それは未だ當然な苦痛だ。しかし吾々は世を支配する最後の思想をどうか厭世思想であらしめ度くない。依然とした厭世を此世の終極にしてはおけない。

何人と雖もゝし健全ならば厭世家にはなり度くあるまい。よし理性の眼によつて否でも應でも此世の厭ふべきものであることが明かに見へたにしても猶ほ厭世家にはなり度くないと思ふものが彼の中にはなくてはならない。止むを得ず此世を厭つてもその厭ふことが既に恐ろしい苦痛でなければならない。苦痛のない厭世主義は（もしそ

んなものがあるとすれば）悦びのない幸福主義と同じである。それは虚偽を弄ぶ悪戯である。生れ乍らにして早くから厭世に傾くことを強ゐられる者はいくらもあるであらう。それ等は同情すべき不幸な人々である。併し生れ乍らにして厭世を愛するものがあればそれは病的な畸形兒である。人間はその先天的性質に從へば、なるべくならば否定よりは肯定を、厭世よりは樂天を欲すべき筈である。それが人の情であり、長所である。その情に負けて當然否定しなくてはならないもの迄も否定し得ないのは弱者である。かゝる弱い人には眞の生きた肯定の喜びは得られない。自己の内外に實在する多くの暗黒を見て見ない振りをする、そして自分の樂な、樂しめる方面に許り閼れやうとしてゐる人間は憐れむべき人間である。かゝる人間は肯定主義を主張する資格はない。又主張してもそれによつて自らを活かすことは出來ず、猶更人を活かすことは出來ない。何故ならば眞の肯定は勝利であつて安全な避難ではないからである。

しかし眞の肯定と幸福とを望まずに活きてゐるものは勝利を欲せずに唯死を願ふ爲



めに戰場に出るやうなものである。

人生は戰である。内と内との、内と外との間斷なき戰である。しかし吾々は空しく討死する爲めに戰ひはしない。活きる爲めに戰つてゐるのだ。避難しやうとは思はないが、何處迄も勝ち度いのだ。そして活き度いのだ。又此世に生れたことが吾々の運命であり、宿命である以上は出來るだけその運命を活かして此世を祝福し、此世に生れたことを祝福し度いのだ。祝福出來るやうになり度いのだ。

そしてならうことなら此世に永遠な幸福を持ち來たして、此世に住む萬億の人々が子々孫々永く此世に生れたことを神に感謝出來るやうにし度いのだ。そしてその爲めに自己の一身を捧げて、生涯聖く戰い拔く處に深い感謝と嚴肅な幸福とを感じ度いのだ。

それが吾々の生命の奥底の聲だ。

自分は時につくゞく此世は厭なものだなと思ふことがある。そして自分はそれに愛

想を盡かし拔いたやうに唯々溜息を吐くより外に仕方のない時がある。そして自分に力が餘りになさ過ぎることを情けなく齒痒く思ふ。「俺はこれでもわりに一生懸命な心算だ。しかし俺なんぞがゐたつてゐなかつたとて世界は枯葉が一つ無くなつた位にしか思はないのだ。全でゴマメの齒ぎしりだ。此小さな俺の意志なんかは世界にとつては零も同じだ。俺がいくら力瘤を入れて鯱鉾立して怒つた處で世間は蚊が鳴く位いにさへも思はないのだ。」かう云ふ氣がよくすることがある。「なあに、今に見てゐろ。いくらお前が俺の意志を無視してそれを感じまいとしても無理にも感じさせてやるから。感じさせずにはおかないから。」かう思つて見ても矢張りある心細さが殘る。しかしそれでも自分は無論勇氣を失いはしない。自分は自分が未だ少しでも勇氣を挫く資格のないことを知り拔いてゐる。

しかし自分に就いて云ふことを許されるならば、厭世主義は一體は自分の性には合はないらしい。



自分は時には隨分悲觀する質である。不服家である。小さな事も容易には諦めるとが出來ない性質を持つてゐる。ものを見て見ないふりをするとに（樂に出來る場合もあるが）中々困難を感じる性質を持つてゐる。觸れまいと思つてもさう思へば思ふ程却つて猶ほその方に曳きつけられてついそれに觸れて了ふ誘惑をカナリ多く感じる性質を持つてゐる。要するに自分はわりに樂天家にはなりにくゝ生れてゐる。そして自分は一方隨分否定的な人間だ。自分は兄弟や人からよく破壞的な人間だと云はれた。そしてそれはある處迄當つてゐる。自分は生來一面に於ては恐しく我儘で、怒り易く、嫌い易く、一寸したことにも不快を感じ易く、少し病的に邪推深く、孤し子のやうにひがみ強く、反抗心が強く、そして一旦焦れて怒り出すと苦しみ乍ら隨分破壞的に、亂暴になつて行く野蠻な性質を持つてゐる。（それが爲めに自分はよく人からの誤解を招いて、ある人々は自分を未だに唯さう云ふ方面許りの粗暴な人間のやうに思つてゐるが。）そしてさう云ふ現象は多く自分の我儘なエゴイズムから起るのであるが、又時に

は全く道德的な動機で起ることもある。しかし要するにそれも自分の人生觀に影響して來ると云ふやうなことはなく、大抵一時的な征服慾の火に化して了ふ。

それにしても自分の外界に對する失望や、不快や、憤怒は未だ自分自身に就いての悲觀や、懷疑的苦惱や、絶望の淋しさのやうに痛切に、執拗くは來ない。そして自分の絶望や、苦しみは多く自己に就いてゞあつて、外界に就いてと云ふとは比較的少ない。欲望の餘りに大きく遼遠である爲めに未だ實力の伴はない處から來る失望、齒痒ゆさ、素質に對する懷疑、未來に對する不安……何と云つてもそれ等が一番自分には直接な苦痛となり易い。而も此性質が、又自分にはある懷疑を起させない譯には行かない。餘りに自分のことばかりが當面の問題になり易い個人主義的な傾向の性質が自分には何となく不安になり、不滿になるのである。これ等のいろ〳〵な不安が毎も餘りに急に來るので他の不安が何うしても後になる。生長が足りない故であらう。

尤も自分はそれを當然な事だとも思ふ。もし其點で人から譏られたら自分は「馬鹿」



と云つて叱るだらう。しかし自分の中のある欲望はそれ丈けであることには迚も滿足出來ないのだ。

併し自分のかゝる絶望も厭世家になる處迄は行かない。自分はその絶望の中に藻掻くことによつて無理にも自分をある希望迄漕ぎつけさせる。そしてその希望を得ると自分はわりに樂觀的になる。それも何うせ當座の間ではあるが。

自分は失戀した時隨分ひどく弱つた。しかしそれでも嘗て一度も自殺しやう抔といふ考へに觸れたことはなかつた。それは一つには自分の自覺が其時もうわりに生長してゐたからであつた。又自分はその戀愛の始めから自分の望みは到底果されないに定まつてゐると無理にも思ふやうに努めて。いざと云ふ時の苦痛と絶望とに用心深く豫防線を十重廿重に張つておいた故もあつた。しかし又自分が一時でも踏みつけられてゐることの意識には堪えられない性質を持つてゐるからでもあつた。自分は少し肯定し度い欲望を持ち過ぎてゐるやうにも思はれる。

故に自分は外界のことに關してもなるべくならば肯定し度い氣が強い。勿論今の自分の力として未だ肯定し度くもすることが出來ないことが隨分澤山ある。そして自分はそれに觸れる時には全く他事ならない氣がして自分に直接關係あることのやうに不快に思ひ、厭い、腹を立てることがある。何うにか出來ないものかと思ふ。しかし、自分はたとへそれ等の最もひどい例を百も千も見せられやうとも、未だ人類に絶望することは出來ないであらう。そして自分は人類に絶望し切らない間は如何に自己に絶望しやうとも、又現世のいろ〳〵なことに絶望しやうとも、厭世家にはなれない。

そして自分はよし一方の理性や知識によつて強く厭世主義に惹きつけられることがあらうとも、自分の奥底の感情は充分それに反抗して其方に行くまいと足を突つ張るであらう。何者かゞ自分の内にそれは自分の就くべき正道でないことをさゝやく。「いくらお前が「否」と云つたとてさうに定まつてゐるではないか。それは火を見るよりも明かな道理だ。事實だ。」かう云はれても自分は「成る程さうだな。では其方に行かう



と云ふ氣にはなれない。寧ろ盲目的にもそれに反抗してその正反對の方向に眼を向けやうとする。「それも一つの見方だ。併し人生はそれ丈けではあるまい。其處には未だ何かそれ以上なものがないか。いや、確かにある。人生は現世以上のものを含むでゐる。そして其調和を俺は求めるのだ。」自分はかう云ふであらう。

誰も好んで厭世家になるものはあるまい。厭世主義が好きだと云ふので厭世家になるものはあるまい。そんなことで厭世家になれるものでないことは定まつてゐる。本當の道は内から否應なしに其方にある不可抗な力によつて強ゐられて行く道である。苦しい、然し動かすことの出來ない絶對の道である。かくして其道に入るのでなければ眞に其道を活かし、其道に活きることは出來ない。未だ何うにでも理窟で動かすことの出來る間は、又迷ふ間は寧ろ其道に入らないのに如かない。自分は自分の感情が合點かず、實感が一致しないことを唯そのアイディア丈けで云ふことを恥じる。自分の中の自然から離れた理窟を云ふことを恥じる。自分は實に世を厭い度くないのだ。自

分は天を慕ふと共に地を愛すべく作られ、且つ生れたのだ。よし此世が殘らず腐れてゐることを疑ふ餘地もなく明知したとしても未だ此世を否定し去り度くないものが自分の中にはあるのだ。自分は其處に何かを發見するであらう。

自分はそれを卑怯な性質とは思はない。それは一つには確かに自分の境遇が然らしめてゐるのであらう。境遇は殊にある人の心に思いがけない程深い大きな影響を及ぼすものである。併したとへ自分が未だ自分のさう云ふ特性に多くの價値を認めることが出來ないとしても、自分は自分の内の「自然」に背くことは出來ない。自分はそれを活かさなければならない。

「あゝ、二つの靈が己の胸の内に宿つてゐる。その一つが他の一つから離れやうとしてゐる。」

一つは荒々しい愛惜の情を以て章魚の足めいた搦みつく道具で、下界に搦みついてゐる。



今一つは無理に塵を離れて
高い靈どもの世界によじ登らうとしてゐる。」（ファウスト）

此の二つの靈が矢張り自分の中にもある。

自分は此世を、此生を、此「地」を深く愛するものだ。又それは確かに愛するに足るものである。自分はそれの爲めには死んでも構はないとさへ思つてゐる。

「この己の靈で人間の最上のもの深甚のものを捉へて
歡喜をも苦痛をも此胸の中に積んで
此自我を即人生になる迄擴大して
遂にはその人生と云ふものと同じく滅びて見やう。」（ファウスト）

これも自分の願だ。

更に實を云ふと、自分は人にもなるべくならば厭世家になつてほしくないのだ。（自分は虫のいゝ怠け者の似而非厭世家のことを云つてゐるのではない。たえず活きやう

と熱心に努力して居乍ら猶は厭世的にならざるを得ない同情すべき人々のことを云つてゐるのだ。)彼等に厭世以上の力や信仰を與へることもえせずにかく云ふは少し厚かまし過ぎるとは思ふ。しかしよし此現世を厭はうとも此人生を呪つてほしくないのだ。此「地」を呪つてほしくないのだ。そして出來ることなら更に自ら進んで積極的に生を活かしてほしいのだ。呪ふとは愛なき弱者のする事である。愛と智慧との眼さへ開ければ其處にも屹度輝ける永遠の姿はあるのだ。

自分は吾々がもし眞に健全を愛し、たえず自己の内の愛と光りとを生長させて行つたならば、そして堅忍不拔の意志を以て高い智慧と幸福とを求めて止むことがなかつたならば此地上に於ていくらも偉大な歡喜や、法悅や、感謝や、幸福を獲ることが出來ることを信じてゐるものだ。自分はかゝる眞理を實現した多くの偉人の例を知つてゐる。自分はよしそれが迷信であらうと此信念なしには生きてゐられないものだ。

「迷信は力强い、眞摯な、進歩的な人間の先天性である。不信は弱い、詰らない、退



歩的な人間の特性である。」とゲーテも云つてゐる。

男らしく、勇ましく、鐵の如き意力を以て如何なる艱難辛苦や、慘禍にもめげず、それに堪え忍んで健全な愛と、希望とを失はず此地上に住む萬億の同胞の爲めに、懷しい人生の爲めに、又母の「地」の爲めにお互に永久に健鬪して行き度いと自分は思ふ。そして其處に貴い生甲斐を感じ度く思ふ。そして恐らくは「地」も亦自分の愛兒である人類に見捨てられ度くはないであらう。

「人生はあらずもがなのものだ。」自分は此の怖ろしい言葉を放つた天才に對して厚い尊敬を拂ふ。しかし少くも此畏敬すべき言葉の思想にはどうしても同感は出來ないものだ。又同感し度くないものだ、と云ふ事を謙遜な心を以て云はずにはゐられない。

そんなとは人間の云ふべき言葉ではないと自分は思つてゐる

人生は涙だ。しかしエゴイスティックな涙を流すことは耻じろ。

自分は人生の上に飽く迄も健全主義を愛する。又要求する。自分は病的は嫌いだ。

少くも病的を愛することは嫌いだ。自分は全體を摑み度い。一部に偏するとは禍だ。

又自分は一方わりに「足る」と云ふことを知つてゐる。素より自分は自己に對しては飽く迄も足ることを知らない。人類に對しても放擲した氣には無論なれない。しかし自分は理想家であると同時にリアリストだ。何から何迄自分の理想を要求しやうとはしない。そんなことを云つてゐても自分は隨分要求家ではある。他に對しても中々不滿家である。征服欲を起すことの名人だ。

併し又要求し度くないと思ふものも持つてゐる。なるべく外部のものには寛大になり度いと思つてゐる。そして唯自分に要求するがいゝと思つてゐる。それは中々口で云ふやうに易く實行は出來ない。しかし自分は外界に對する理想の手始めとして先づ自己に理想家であり度く思ふ。これはむしろ當然な欲求だ。かくは云ふものゝ自分は未だ實は自己に對してもさう嚴格な理想家でもない。自分は何しろ未だ隨分不徹底だ。自分の力と意志とが未だ自分に眞に徹底することを許さない。しかし自分は近頃になつて漸く少し自分の眼が開きかけたやうな氣はしてゐる。



自分は此世にショーペンハウエルやバイロン等の人々がゐたことを感謝すると共に一方ホイットマンや、ブレークや、ゲーテのゐたことをも感謝するものだ。

自分の内にはいろ〳〵なものがある。否定家があり、肯定家があり、理想家があり、現實家があり、わりに厭世家であるものもあり、わりに樂天家であるものもある。エゴイストもあり、さうでないものもある。宗教家になり度いものもあり、藝術家で行き度いものもある。愛、憎、淨いもの、穢れたもの、輝いたもの、暗いもの、美しいもの、醜いもの、善良なもの、善良でないもの、強いもの、弱い者……、ごた〳〵してゐる。そしてそれ等が自分の中に軋轢し、格闘し、抱き合い、反撥し合つてゐる。そして自分はそれ等の調和と爭いとから漸次に自己を鍛へ、擴大し、向上させることによつて何かしら人生に善い貢獻を爲し度いと願ふ。人類に少しでも益を與へ度いと願ふ。さうして出來得べくむば此世に眞の幸福の一片なりともを齎らして、此世の大

部分を支配してゐる暗黑と厭世思想とから人々を解放し度いと願ふ。苦しむ人々をして此世に生れたことを心から神に感謝出來るやうにし度いものだと願ふ。さう云ふことは今の自分として怖ろしいが。自分の生活と、力と、一方の性質とを顧みる時、「僞善者」の觀念に觸れずにかく云ふことは今の自分に未だ出來ないことを自分は少し耻かしく思ふ。

自分は僞善者になることを怖れる。それにはなり度くない。しかし自分は畢竟單なる藝術家丈けの人間では畢り度くないのだ。「僞善」と云ふ觀念の奴隷にもなつてゐられない。

「余はわが一生が、わが理性が、わが光りが專らわが同胞を光明に導く目的の爲めに余に與へられたことを信ずる。余はわが眞理に就いての知識が此目的の爲めに余に貸與せられた才能であり、而してその才能は消費さるゝ時にのみ火である處の火であることを信ずる。余はわが生の唯一の意義が余が內にある光りによつてのみ生くべきであり、而して其光りを人々が見得る爲めに彼等の前に高くかざして行くべきであることを信ずる。」 トルストイ

これが結論だ。こゝにライフがある。吾々の就くべき唯一のリアルな、そしてヒロイックなライフがある。吾々は思想のデカダンになつてはゐられない。何時迄も精神界のボヘミアンになつてはゐられない。

（一五、九、一八）



○

何しろもう少し力が內に育つて呉れないとどうにも仕樣がない。自分は一方隨分藝術家以外の大望を起すが、そして實感がそれに及び得ないことに不滿を感じるが、さう云ふ實感が今の自分にビシ〳〵當つて來たら迚もそれを活かせる處か、却つてそれに押しつぶされて了ふより仕方があるまいと思へる。何でもある丈けの實力がそれに相應した實感を生むのだ。實力以上の實感を感じることは出來ない。ものを實感出來

るのはそれを生かす實力あることの證據だ。實感出來ないのはたとへそれを感じやうともそれを生かすことの出來ない證據だ。吾々には大きな實感を獲度い獲るやうになり度い、と云ふ欲望は起るが、何と云つても吾々は自己の實力以内での實感を出來る丈け活かして行くより仕方がないのだ。さうすれば段々道が開け、段々自分になる。なるまいとしても自分になる。實感は欺けない。

基督や釋迦であればこそ、そしてあれ丈けの力があつたればこそあのやうな大きな尊い實感は得られたのだ。そしてそれに堪え、それを永遠に活かして行くことが出來たのだ。分りきつたことだが。

とにかくもつと勉強して、實際に苦しむで、多くの深い經驗を積んで内に力を養つて行くより仕方がない。そして何と云つても所詮より善き自分になつて行くより仕方がない。其處に不安と淋しさとがある。しかし勇氣も湧く。

何しろ永遠を相手の仕事だ。一朝一夕に成功が獲られては成功も有難味がない。



未だ云い度いこともいろ〳〵ありますが、今度はこれ丈けにしておきます。

（九、十九）

# 「注意」と「客觀」等に就いて

## 手紙の返事

――兄御手紙を見ました。御返事に僕は又自分が此間中考えたことを少し書かうと思ひます。

數日前に私の妻が町へ出た序でに花屋で花を少し買つて來ました。さうしてその中の三本を小さな花活けにさして私の留守に私の机の上に飾つておきました。私の机の上に花がのつた事は珍らしいことでした。

それは紅と白と桃色とのカーネーションでした。

しかし私はそれを見ましたが、一度もそれに注意した事を意識せずに數日を經ました。



た。毎日机に向ふ私は自分の眼の前に花があることを知つてゐました。しかし一度もそれに注意の眼を向けたことはありませんでした。私の机の上には花はあつてもないと同じでした。

しかしある晩私は妻や友と自分の机のわきで話をしてゐる間に、一寸退屈を感じたものですからふと机の上を見廻はしました。そして私の眼は自然にその花の上に止まりました。私は何氣なしにそれを花活けごと手に取つて見ました。すると其時にふと私は其花に對して注意をし始めました。私の其花に對する注意は始めて其時呼び覺まされたのです。

私は急にある全く新鮮な感じに打たれました。それは強くはありませんでしたが、弱くもありませんでした。事實其瞬間私は貴兄の想像以上に一寸ある一種の淡い驚きと云つたやうな感じを受けたのです。何と云ふのですか、今其感じをはつきり説明することは出來ませんが、とにかく私は「變なものだな」と思つたのです。

それはとにかく綺麗と云ふべき感じでした。餘んまり簡單に綺麗に出來てゐるので私はほゝ笑み度くなりました。私は快かつたのでしやう。

「こんなものがあるのかな。」と私は思いました。私は實際感心しました。凡そコンヂンショナルな、誰でも感じ得ることではありましやうが、とにかくこんな美しい感じのするものが自然に咲くやうに出來てゐると云ふことは何と云つても不思議な事實ではありませんか。人間はそれにふれてある可憐な愛を感ぜずにはゐられません。そして何千年の昔の人と同じやうに不思議なものだと感ぜずにはゐられません。

人はかう云ふ自然のものにふれて、人類が此の人間社會に住んでゐると同時に常に「自然界」の中に住んでゐるものだと云ふことを感ぜずにはゐられません。そうしてその事を感謝だと思はずにはゐられません。もしそれを感謝だと感じない人があるとすればそれは凡そ不幸な人と云はなければなりません。

さうして人は此世界が如何に人間の文明によつて忙しくならうとも、人間社會ではば



かり成り立つてゐるものではない。それは寧ろ「自然」と云ふ大きな母體の掌の上に起つてゐる一の——吾々がそれに結びつけられてゐる處の——現象であると云ふことを覺らない譯には行きません。

此無常な人間社會の一方には、そして裏には、常に自然界と云ふものが存在してゐると云ふ事實は吾々にとつては慰めでもあり、感謝でもあり、悅びでもあり、又希望でもあります。此世に住む吾々が其處の砲兵工廠や、造船所や、鐵砲や、電車や、自働車や、荷車の響から何の氣なしに其處に戻つて行く度毎に其靜寂な聖地に於て吾々の心は毎も原始的な洗禮を受け、身そゞぎを受けることが出來るのです。さうして吾々は自分が此人間社會の一員であると同時に、自然界の一人であることを覺えるのです。自分の中に社會的分子があると共に、小供のやうに純眞な心を以て親の「自然」と合體し、融和し、舞踏し得る美しい「小自然」があることを知るのです。さうして其兩方が吾々にとつて必要である事を知るのです。

私は暫く此「自然」の事を忘れたやうになつてゐたのでした。其の事を殆んど意識することなしに其頃の幾日かを過してゐました。さうして私の眼はごた〳〵した人間社會の上にのみ漠然と、力無げに向けられてゐました。ですから私が此時不意に此花を視て「こんなものがあるのか。」と今更のやうに感じたことに不思議はなかつたのです。其時私には其花がある暗示であるやうに思はれた事は嘘ではありません。さうして私はかゝる美の存在を見逃してはならないと思ひました。

私は暫く詩人のやうにその花に見惚れてゐました。「何と云ふ美しいものだ。そして何と云ふ美しいものがあるのだ。奇しなものだ。」と私は繰り返へして思はずにはゐられませんでした。

そして私は其時に物に注意するのと、注意しないのとでは斯樣に違ふものかと云ふことを感ぜずにはゐられませんでした。人々は花屋の前を過ぎて只其處に花屋があると外思いません。或は其ショー、ウヰンドーを見て簡單に、又は習慣的にふと綺麗だと



思ふ位のものです。花園を通る時でも同じです。しかし吾々が其花の中の一つを何氣なく手にとつてそれを自然に注意して見る時にそれは全く違つた意義のものになります。吾々が只肉眼でものを見る丈けでは注意ではありません。それは只外部のものが物を映すやうに出來てゐる吾々の眼に偶然に映る丈けのことです。吾々の全意識が自然にある對象に向つて集中される時に吾々はそれを注意したのです。そうして其時にその對象は始めて其自身の眞の價値と意義と、生命とを吾々に啓示するのです。注意しない人には物は何物をも示しません。即ち注意されないものは死物も同樣であつて注意されて始めて物は吾々にとつて生物となるのです。

自然は常に默つてゐます。そして見るものの見るやうに見させておきます。さうしてたとへ自分の顏に眼を向けても自分の心を見ない多くの者を淋しい微笑みを以て見返へします。併したまに注意する者にはそれは喜んで何かをさゝやきます。

注意すると注意しないのとが如何に違ふかと云ふことは一つ本を讀んでも、又學校

の授業の場合に於ても凡そ明かなことであります。

眞の注意することの出來る人には一は十の意義を現はします。「凡人が一つの色しか見ない處にチチアンは千の色を見分ける。」とか云ふ言葉がありますが、それも要するに同じことを云つたものと思ひます。して見ると此注意力と云ふものが如何に大事なものかと云ふ事が分ると思います。

私は此處で少し論をすゝめたく思います。

此注意と云ふことは他の言葉で云へば客觀であります。さうして客觀とは取りも直さず經驗のことであると云ふことが出來ると思います。

經驗と一口に云ふと何でもないことのやうですが、實は嚴格に云ふと、眞の經驗の出來る人は極めて少ないのです。普通の意味で云へば何人も五官と意識とを備えてゐれば經驗することは出來ます。併し眞の智慧を增す意味に於て彼等は殆んど何も經驗しません。彼等の經驗によつて彼等の眼は幾重にも〳〵膜を被せられます。しかし彼



等の眼は開かれません。彼等の所謂知識は廣くなります。しかし彼等の智慧は進みません。眞に經驗する人は必ず一歩進まずにはゐない者です。

經驗とは直覺的認識（少し堅い言葉のやうですが）によつて物を有りの儘に感じ、その感じによつて物の眞實を知る事です。物の表面ではなく、眞相を認識することです。認識とは實感のことです。實感によつて物を有機的に知ることです。實際にぶつかつて純粹に感じる處の一の發見です。習慣や、概念によつてものに觸れることではありません。トルストイが死刑の執行を見、首が胴から切れ離されて轉がり落ちるのを見て、之は惡い事だと心の底から感じた、死刑は廢止されなければいけないと思つた、それが實感です。認識です。客觀です。經驗です。學說によつてそれは殘酷な感じのするものではあるが社會の秩序上止むを得ない、當然な制裁だと云ふのは實感ではありません。經驗ではありません。それは理屈です。議論です。主觀です。

何人も主觀を持つことは出來ます。しかし客觀は必ずしも何人によつても出來るも

のではありません。ショーペンハウエルは「客觀を爲し得るものは唯天才のみだ。」と云つてゐるのは眞理だと思ひます。それはある意味に於ては誰でも客觀者にはなり得ます。しかし彼等の客觀は眞の客觀ではありません。云はゞ主觀的客觀であつて、純粹客觀ではありません。

林檎が地に落ちるのを見て、「變だ」と思ふのは客觀であります。さうしてある意味に於て既に發見です。併し何人もニュートン以外には其處に注意しませんでした 彼等は皆それは當り前のことだと思つてゐたのでしやう。しかし「何故それは落ちるか、」と云ふことには氣も止めず、解つてもゐなかつたのです。彼等は只概念的にそれが當然落ちるべきものだと云ふ空な主觀を持つてゐたに過ぎません。或は一寸それに疑問を起しかけてもそんな分りきつたやうなことを疑問にするのは自分の幼稚と馬鹿とを曝すやうなもので見共ないと思つたでしやう。そしてそれを疑問にする勇氣もなかつたでしやう。しかしニュートンのやうに飽く迄も眞理を求め愛した人はその疑問にぶ



つかつて喰ひ入らずにはゐられなかつたのです。そしてそれ丈の認識力を備えてゐた彼は又それからあれ丈けの原理を割り出す實力を持つてゐました。そうしてあの偉大な發見の端緒は理屈ではありません。矢張り客觀です。注意です。實感です。

此の世のあらゆる偉大な眞理の發見が、皆かくして天才の客觀によつて獲られました。老人を見、病人を見、死人を見た者は釋迦以前に何千萬、何億萬人ゐたか知れません。しかしそれは彼等にとつて何の深い經驗にもならなかつたのです。眞理はある偉大な認識者、客觀者が現はれる迄其出現を待たなければなりません。しかし主觀は如何に暗愚な、幼稚な、或は間違つたものにしろ何千年の以前から常に何人の心の中にもあつたのです。

さうして眞の偉大な客觀者、即ち智者には眞理を發現するのにたゞ一寸した僅かの外部的暗示を以て足ると云ふことが此釋迦の例によつても分ります。釋迦にとつてあれ丈けの大人生觀と、大宗教とを產み出し得るには七十迄も此現世の中にさまよつて

ゐていろ〳〵の世俗的經驗を嘗め盡す必要はなかつたのです。彼は宮殿に住む世間を知らない若い王子であつて、從者と共に僅か三遍大道に出遊しさへすればそれで充分だつたのです。それは恐くは實傳ではないでしやう。又、釋迦が幼ない時から常にいろ〳〵のことを深く考えて、內面の修養や懷疑に苦しむでゐたことも事實でしやう。併したとへそれが口碑傳說であるにしろ、それは深い眞理を語つてゐると思います。

盲人は千年活きてあらゆる地上を漂浪して廻らうとも、何も見るものではありません。明者は其反對です。彼は一を聞いて十を知る處ではありません。百も、千も、萬も知ります。彼にとつて萬を知るには一から萬迄一つ〳〵數えて行く必要はないのです。「大空が青いと云ふことを知るには世界を一週して見る必要はない。」とゲーテも云つてゐます。

矢張りショーペンハウエルが云つてゐたことですが、天才と能才との異ふ處は能才が理知によつて推理的に解つて行く處を天才は直覺的感情によつて一遍に解つて了ふ



處にあると云つてゐました。いやに人の言葉を引くペダントのやうですが、アルツイバーセフも「觀察の才能と云ふものは一の偉大な才能だ。」と同じやうなことを云つてゐました。此觀察の才能とは即ち直覺的感情 或は感情的認識のことであつて、たしかにそれは偉大な、且つ大切なものであるに相違ありません。

大抵な大人は——私の見る處では——眞の經驗をなし得ずにゐます。彼等が經驗したのは彼等が未だ十歲乃至十五歲位迄の間のことであつて、それより大きくなると最う彼等は永久に何物をも經驗することの出來ない概念か主觀の化石になります。彼等は月や、太陽や、人間の死にふれてさへも純粹にものを感じると云ふことはありません。よし彼等が何かを感じたとしてもその感情は多くの場合コンヱンションから自由に獨立することが出來ません。それは大抵型や習慣によつて捉はれた死せる感情であつて、純な感情でもなければ、又個性的な生きた感情でもありません。彼等の多くはそれ等のものにふれてそれ等のものは元來美しいものだ、又誰でも常に美しいと思ひ、

感じて來た處のものだと思ふから美しいと思ふのです。花を見れば綺麗だと感じることになつてゐる、當然さう感じなければならないことだと思ふから自分もさう感じることにして、又確かにさう感じてゐることと思つてゐます。それが全部でなく、未だ彼等の中に多少獨立的觀照をなすものがあるにしろ、それの大部分が既に囚はれてゐると云ふことは事實です。さうして彼等の喜びは直接にその對象自身からは來ずに、それを大勢の者と一緒に愉快に浮かれて見てゐると云ふ閑散な意識、自分が愉快な狀態に置かれてゐると云ふ快樂的意識から來ることが多いのです。つまり實は主觀的感情であるものを客觀的感情であると思つてゐるのです。昔から月を觀ると云ふ習慣がなく、花見を愛すると云ふ習慣がなかつたならば彼等の多くは月見もしなければ、花見にも出掛けないでしやう。さうして月夜や、花のトンネルの下を平氣で通るでしやう。景色の名所でも何でも皆同じことです。

併し實はそれも要するに皆彼等の無智から來ることではあります。何故なら客觀と



は即ち主觀の反映であるからであります。內にあるものが外の鏡に映ることです。外部にあるものが內部にある光りに照らされて、それを再び內が見ることであります。それ故に主觀と客觀とは素より常に正比例して、平衡を保つてゐます。其二つは互に相俟つたものであつて、切り離すことは出來ません。否、それは一つです。即ち人格です。主觀丈けが勝れてゐて客觀が劣つてゐると云ふことなく、優れた客觀をなすものゝ主觀が優れてゐないと云ふことはありません。偉大な主觀を持つてゐる人のみ、偉大な、そして非常な客觀をなすものであることは云ふ迄もありません。

故にニュートンが林檎の實が樹から落ちるのに注意したことは、偶然ではありません。釋迦が老、病、死の三者に遭つて恐ろしい感動を受けたことは偶然ではありません。共に必然です。ある人が彼にどうしてそんなことに氣がついたかと問ふた時、ニュートンは「自分は始終それ等のことを考えてゐた。」と云つた相であります。そして誰が天才でなくして常に〳〵それ等のことを熱心に考えてゐましやう。

誰しも感情を持つてゐます。恰度誰しも頭脳を持つてゐるやうに。併し眞に善い頭脳を持つたものが少いやうに、善い感情を持つたものも少ないのです。普通の場合、彼等の感情とは彼等の感覺です。生理的感情です。彼等は直ぐ怒ります。笑います。喜びます。悲しみます。憎みます。感心します。しかしそれ等は皆多く生理的感情より餘り以上のものではありません。其處には動物の感じる感情？に毛の生へた位のものがある許りで心靈の光りは現はれる筈がないのです。何故なら彼等は靈的でないからです。餘りに多く物質的であつて、餘りに少く精神的であるからです。靈的でない人間が靈的な感情を持ち得る譯はありません。

しかし眞の感情は靈的なものであると思ひます。人格の奥底から發して、奥底に迄ひゞくものだと思います。それは生理的感覺ではありません。もつと深いものです。それは自然に深い内面の靈魂を透して外に現はれます。その意味に於てそれは矢張りその人格の支配を受けます。人格と感情とは別物であることが出來ません。それは理



性と同じやうに、其人の人格から自由に獨立することが出來ません。しかしそれはその人格を透すことによつてその光りをけがされません。却つて光りを増し、力を強めます。恰度明かなレンズを通す光りがその純潔さを損はれずに、却つてより明るくされるやうに。獨立でないと云ふことは其自身何の惡いことでもなければ、生命のないことでもありません。却つてそれを支配するものが偉大であり、崇高であることが大切なのです。そしてそれと眞に結びついて調和してゐることが大切なのです。

凡人も天才も、偉人も小人も皆それ〴〵必ず主觀を持つてゐます。人間は他の動物に比して著しく主觀的動物であるからです。要はその主觀自身の性質如何です。彼等は皆客觀します。しかし主觀を離れて客觀することが出來ません。そして天才や偉い人間の場合にはその主觀は即ち偉大な靈魂を意味し、深い智慧や、大きな愛を意味し、凡人や小人の場合にはその主觀は囚はれた習慣による淺墓な概念や、固つた謬見を意味します。

何かに囚はれると云ふ事はそれによつて活かされる場合には悪い事ではなく、むしろ善いことです。そしてさう云ふ活かされる場合にはそれの支配を受けてゐてもそれに囚はれてゐると云ふ感じはしません。むしろ素直な、自由な、そして自然な、感じを與へます。それは眞の智慧と云ふものが空氣のやうに自由で、永遠で、又宇宙的な性質のものであるからだと云ふ氣がします。

しかしかゝる智慧は何人も得ることが出來ると云ふ譯には行きません。之を持つにはいろ〳〵の優れた條件が要ります。私はそれを茲に説明する必要はない氣がします。つまり一言で云へば天才や聖賢は皆それを持つてゐるのです。しかし凡人は其代りに低い概念を以て自分の主觀を埋めます。恰度それ位の概念が彼等には相應してゐるのです。そしてそれは彼等の空虚な内部を占領して其處の主になります。それは彼等の生活に缺くべからざるものであり、彼等はそれによつて外生きることが出來ません。彼等はそれの中に生き、その中に生長します。しかしそれを生かすことが出來ず、



自由にすることが出來ません。彼等囚人はその狹い型の中より一歩外へ出れば迷兒のやうに何もかも分らなくなつて了ふのです。立場を失ふのです。そして彼等は永久に動きの取れない囚人で畢り、又それで滿足するのです。さうして彼等は恰度天才が無意識に透明な智慧を透してものを見るやうに、一々其概念捉はれた主觀を以てものを見ます。ものにふれます。そして其死んだ型の概念は彼等の眼と對象物との間に必ず壁のやうに立ち塞がります。そして彼等はどうしても其壁を通さずに自己の眼を以て眞にものを有りの儘に正視することが出來ないのです。彼等にはその自信もなく、力もありません。

天才は自然に内がはにある智慧や愛（即ち靈）を通してものを見ます。しかしそれは透明な、度の合つた眼鏡のやうなものであつて、彼等はそれを通すことによつてい〳〵明かに活き〳〵と、正確にものを見ますけれども、凡人がものを見る場合には色眼鏡をかけてゐるやうなものです。彼等はその色から脱することが出來ず、そして

その色は彼等の知覺を曇らし、鈍くし、不純にします。その色は素より個性の色ではなくして、概念の色です。捉はれた主觀の色です。眞の智慧は澄んだ水のやうにそんな色を持つてゐません。そして個性はそんな色眼鏡を掛けずに、明かな眼鏡を以てものを率直に、ありのまゝに正視する處におのづから現はれる自然の差別です。人力の支配を超えた處に起る自然の現象です。

故にものゝ見方や感じ方を見れば其人が天才であるか否かは大抵想像がつくことです。凡人にはどうしても感じられない、天才丈けの感じ方と云ふものがあります。凡人は永遠的な事を感じるものではありません。絶對的な感じ方を爲すものではありません。彼等は常識的に、習慣的に、理屈的にものを感じやうとします。彼等はそれ以外の感じ方や、考へ方は間違つてゐると思つてゐるのです。しかし天才は直接にものの眞髄を感じます。ものゝ根底に潜む精神と、其生命とを感じます。そしてそれを端緒にしてそれを傳つて猶ほ奥へ〳〵と踏み込みます。彼は發見が思ふやうに出來ずに



幾度も〳〵迷います。躓きもします。絶望もします。惱みもします。しかしそれでも次第に中心に向つて肉薄します。そして遂には何かにぶつかります。何かを摑みます。その「何か」は永遠なものです。如何に凡人の常識や理屈によつて偏つてゐるやうに見へてもそれは絶對なものです。

此間も友と話したことですが、何よりも大切な事は本當に物を感じると云ふ事だと思ひます。本當にものを深く感じることの出來る人間は確かに選ばれた人です。天才です。永遠な力や、眞理や、美と因緣のある人です。かゝる人にとつて世界は自己の所有も同樣です。萬物は其人のものです。

彼は凡人がかゝる人を閑人だと呼んでゐる間に自己の「感情」と云ふ鑰によつてあらゆる宇宙の秘密の扉を次から次へと開けて行きます。そして其處から得た眞理の知識を福音者の如く人々に傳へます。

多くの人に沈默してゐる自然がその心をさゝやくのはかゝる人に向つてです。又沈

默してゐる自然の無言な言葉に耳を傾けるのはかゝる人です。かゝる少數の使徒に向つて自然はその胸を打ち開けます。そして其人こそ自然と人間との間の通辨になるのです。自然を神とすれば、天才はその使徒です。恰度ペテロやパウロが基督の使徒であるやうに。

かゝる「感情」は宇宙的感情です。從つて人類的感情です。そしてそれは即ち眞の意味に於ける客觀です。發見です。進歩です。新知識です。そして一つの實感はその人の奥底に迄響き、そしてその人の深い心靈を刺戟します。それは其人の中に生きて直ちに肉となり、血となり、其人は又それを活かすことによつて更に一歩先へ進みます。そして彼はかゝる眞の經驗を重ねることによつて自己の世界を次第に内から宇宙的に擴張して行きます。

そしてかゝる感情の主體こそ眞に其人自身の「所有」と呼ぶことが出來ます。此「所有」は外部の如何なる力によつても與へられもせず、奪はれもしません。それは天が



眞に其人に植えつけた處の運命的實在です。之を私は最高の意義に於ける「自我」と云ふことが出來ると思います。

溯れば凡ての人の運命は此「自我」如何によつて決定します。此自我の偉大な人は天才中での天才です。そして此自我のみ、經驗することが出來、生長することが出來ます。此自我を持つ人は凡てのものを自己の眼によつて見ます。自己の客觀によつて發見し、獲得します。彼の感情は彼の生長の武器です。進歩の案内者です。彼は自己の感情を自己の僕ともし、師ともし、水先案内ともして一歩々々未知の世界に進みます。そしてその客觀的經驗によつて世界を自己の中に取り入れ、そしてそれから自己の世界を產み出します。建設します。

彼の眼に凡てのものが、生き〳〵と新鮮な姿で映ります。恰度小供が始めて虹を見て驚き、雷を聞いて驚いたやうに。「大人は小兒の心を失はず。」と云ふやうなことは大人の中にある永久に穢されず、曇らされない純な「自然」を云つたものでありましや

うが、又凡人が成生すると共に早くも經驗しない化石となる處を天才は何時迄經つても小供のやうに新經驗を積み、新知識を獲得ることを云つたものでありましやう。彼は永久に新經驗を積み得るどころではありません。それは彼の智慧と愛とが增すと共に次第に深く、大きくなるのです。

「感情が一切だ。」とゲーテは云つてゐます。感情が一切だと「感情の强弱は天才の强弱に比例する。」とユーゴーは云つてゐます。感情が一切だと云ふことは眞理だと思います。何故なら感情は感情であると同時に其人の智慧を示し、愛を示すからです。

巴里の死刑執行場には恐らく何萬の人がゐたでしやう。さうしてその何萬の人はトルストイと共にその犯人が死刑されるのを目擊したでしやう。しかし其中で心から恐ろしい實感に打たれたものはたゞトルストイ一人でした。眞に客觀し、認識し、發見し、經驗した人も亦トルストイ一人でした。



其トルストイの實感は飽く迄も感情の仕業ではあります。しかしその感情の中にトルストイの智慧も、愛も、實力も、人格も凡て皆反映して現はれてゐるのです。何人がトルストイのやうな大天才、大偉人でなくしてあれ程に强く、深く、眞劍に、眞實にそれから感動することが出來たでしやう。

林檎の實が樹から落ちるのを見て感銘に打たれたと云ふことは實感です。しかし其處に既にニュートンの智慧が現はれ、忠實が現はれ、成功が現はれ、人物が現はれてゐます。釋迦の場合も同じです。凡ての天才は皆此の如き例を持つてゐます。

其反對に何も感じない者にあつては叶いません。彼はどの樣な貴いものにふれても足下の砂利のやうにどん〴〵看過し去つて了います。そして吾々は多くそれに氣づかれずにゐますけれども、もし吾々にもつとものを注意する力と、認識して感じる力とがあつたならば、世界は常に、何處に於ても獲難い「無限」の暗示に充ちてゐるのだと云ふ氣がします。

そして私は又客觀は一の愛の發現だと思います。客觀は先づ感情によつて爲されます。そしてあらゆる感情の中で一番貴い、美しいものは何と云つても「愛」であると云ふことは誰も否定しまいと思ひます。愛が其人に客觀をさせます。偉大な客觀をなす人は偉大な愛を持つてゐる人です。しかし又偉大なる愛を持つてゐる人は偉大な客觀をなします。感情がその女王である愛によつて支配されてゐる人は偉大な人です。又偉大な人にならうとするにはあらゆる感情を愛によつて支配させてゐなくてはならないと思います。

自然に對して愛の深い人は自然の中に多くの貴い客觀をなします。人類に對して愛の深い人は人類の中に多くの貴い客觀をなします。そしてその二つの愛は偉大な人格の中に最高な意義に於ける「宇宙的自我」の中に一つに抱き合い、調和します。自然に對して愛の深い人は又人類に對しても愛の深い人です。只其處に其人其人の個性の差によつていくらか其力の注ぎ處の方面の差異が自然に現はれると云ふ氣はします。



しかし私は今未だ云ひ足りない氣もしますが此感想を茲で擱かうと思ひます。又何れ折を待つて何か書き度いと思ひます。

（一九一六、二、二一）

# 二　週　間　（一幕劇）

ある家の二階にある男の書齋。中央より少し右に寄つた處に亂雜になつた机。其上にランプあり。肘掛椅子。中央に小さきテーブルを圍みて二三の椅子。テーブルの上にはガラス製の花瓶に草花が少し活けてある。テーブルと机との間には小さな瓦斯ストーヴありて好い加減に燃えてゐる。左手の奥に衣桁に隱されて寢床あり。寢床の側の壁には鏡がかかつてゐる。衣桁には女の普段着。男の上被抔だらしなくかけてある。猶室の右左兩に一つ宛窓あり。窓の上や處々に額がかゝつてゐる。風强き冬の夜。窓は風の爲めに時々ガタ々々する。

年頃二十六七の男一人机に凭り頬りと何か書き物をしてゐる。

男、（起ち上り、少し自暴氣味に）あゝ駄目だ〳〵。什うも書けない。（亂暴に呼鈴をたゝく。若き女中入り來る。）

奥さんは未だ歸つて來ないか。

女中、はい。未だお歸りムいません。

男、そうか。よし。（女中出て行く）女中を呼んだ處で仕方がない。妻が歸つて來れば什うせ直ぐ此室に來るのだから女中に訊ねる必要もないのだ。しかし餘り遲いので一寸訊いて見度くもなる。一體何時迄何處をうろついてゐるんだな。えゝ。毎日毎晩……そうともう何時だ。（懷中から時計を出して見る。）十時二十分前か。（彼方此方歩き廻る。そして亂雜に散らばつてゐるものをチャンと整理し花瓶の花を格恰よく直したりする。）どうもいかぬ。馬鹿らしい話だ。（机に凭り今度は本を拔き取つて一心に讀み始める。暫くして又本の上を蔽いて背り返へる。そして溜息を吐く。呼鈴を鳴らす。女中又入り來る。）未だだつたな。

女中。はい。未だで入らつしやいます。しかしもうおつつけお歸りかと存じます。



男、よし〳〵。……そうと戸締りはいゝだらうな。

女中、はい。チャンと致しておきました。

男、そうか。それではよし。（女中去る。）全で俺は山に放した孔雀を番してゐるやうなものだ。こんなにして居た日には俺は一生たつたつて何一つ出來やしない。ほんとに馬鹿な目に逢つたものだ。しかしこれも俺の運なんだから今更什うにもしやうがない。しかしまあ彼女は何處をうろついてゐるんだな。此風の強い夜更け迄。俺は彼女のだらしのない女でないと云ふ事を信じてゐる。彼女は酒を飲んだり男をたらしたりして遊んではゐまい。只彼女の惡い飛び歩く習慣がいけないんだ。俺はそれを直さうと思ふんだが什うも俺の力では容易に直しきらぬ樣だ。何しろ俺がうつかり直さうとでもすると彼女は却つて態と其反對に出るに違いないんだから弱る。

彼方此方歩き廻つてからストーヴの側の椅子にドカンと腰を卸し煙草に火を點ける。そして體を眞直に伸し兩手を頭の後ろで組む。そして煙草を喫かし〳〵暫く無言の儘ストーヴの火を見つめ

てゐる。暫くして起ち上り机の上の呼鈴をけたゝましくたゝく。其時扉の外で女の聲聞こへる。
少時くして妻派手な上被を着て快活に入り來る。男じつとして動かずジロ〳〵皮肉な目付で妻を
睨むでゐる。

男、大層早かつたね。

女、どうも御待屈様。……おゝ寒い。（革手袋をはめた兩手を揉む。上被を脱がずにゐる。）

男、まあ此處へ來てあたるがいゝ。（ストーヴの側の他の椅子を動かす。）外は寒いだらう。

女、（椅子に腰を卸し乍ら）風が酷い割りにそんなでもありませんわ。（兩手を火の側にかざす。）

男、（あてこするやうに）什うしたんだい。大變頰つぺたが赤いやうぢやないか。

女、（笑い乍ら）えゝ。少し醉つぱらつて來たの。

男、ふむ。俺はお前が感心に酒を飲まないと云ふことを知つてゐるさ。又飲まれちや
堪らないからな。……だがお前正直な話、俺は隨分待つたぜ。ほんとにこう毎日
毎晩出歩いて許り居られちや俺は迚も堪つたものぢやないよ。



女、（微笑み乍ら）そんなら貴方も出歩いてゐりやあいゝぢやありませんか。誰も貴方に
留守番をしてゐて呉れと頼んだ譯ぢやなし。

男、俺が餘り出歩くことの好きでないことは、お前にも分つてゐそうなものと思ふが
ね。それに行つて見度いと思ふ處が第一ありはしない。（間）

女、（落付いて）一體何して暮して居るの一日。

男、（笑ひ乍ら）それや此方で訊くことだ。何をしてゐるんだお前は毎日外へ出て。よく
もそんなに出掛ける處があつたもんだな。

女、そりや世の中は廣くつて自家は狹いでしよ。行く處はいくらだつてあるわ。

男、だが差し詰め先づ何處へ行く。Cの處か。

女、Cはもう飽きちやつたわ。妾は飽きつぽいんですからね。

男、そんならDの處か。しかし今朝お前はCの處へ行くと云つて出掛けたぜ。

女、途中で考が變つたの。

男、でDを誘つて相不變AやBやCと方々面白相な處を飛び歩くんだね。飽きもせずに。そして男許りの中に女が一人混つて。

女、まあそんな處ね。……でもそんなに妾のことが氣になるなら貴方も妾と一緒に來ればいゝぢやありませんか。しかしそれは嫌なんでしよ？

男、とお前は安心しきつてゐるからそんなことを云ふ。俺もそれは不愉快さ。お前の好きな奴等は皆んな俺の嫌いな奴ばかりだ。しかし俺はもうこの儘にして何時迄も見てゐる譯にも行かない。明日からは俺も一緒に行つてお前達のお仲間入をするよ。

女、（輕く）どうぞ。（間）

男、（女の上被を脱がすにゐるのを氣にするらしく）だが何故お前は未だ上被を取らないんだね。此室はそんなに寒い筈はないんだが。

女、（からかふやうに）之には何か譯があると思へて？

男、（平然と）何もないね。



女、處があるのよ。

男、ある事は分つてゐるがそれ位の謎ぢや俺も驚かないね。

女、へえ。只ね、此室が汚れてるでしよ。だから着物を大切にする爲めにこうしてる迄のこと。今着物を着換へるのは面倒臭いから。

男、ふん、まあそんなことは什うでもいゝとして、お前はそんなにして飛び歩つてゐる間にちよつとでも俺のことなんぞ考えるやうなことはないのか。

女、あつてよ。中々あるわ。

男、尤も猫を飼つてゐるものは他所へ行つて猫を見たりすると一寸自家の猫のことを考え出したりするからな。考えると云ふことは何でもないことだ。しかしまあ什う云ふ意味でだ。お前が俺のことを少しでも考えることがあると云ふのは。

女、何時も同じ意味で。

男、良心に咎めてか。

女、（笑ふ）へえ、良心ですつて？まあどう云ふ譯で？

男、（苦笑す）負け惜しみはお互に止さうぢやないか。それやあ俺だつて俺がお前の良心の住所（すみか）の全部を占領してゐるとは云はないさ。しかし全然俺がその部分をなしてゐないとお前が云へばそれは嘘だと思ふのだ。

女、そりやあ今の貴方には妾が良心の重もなものになつてゐるとは思へるわ。しかしそれは貴方が勝手に自分でしてゐることで、何も妾が貴方にお頼みした譯ぢやないんですからね。それと同じ報酬を妾の方に要求したつてそれは少し無理だわ。

男、と云ふとお前の良心は什うだと云ふのだ。

女、ですから妾のは貴方が要求する樣に良心と云ふものが貴方に對する貞節といふ意味にならずに只の良心として働いてゐる迄だと云ふんですよ。又妾としてはそれが當り前ぢやありませんか。

男、尤もだ。併しお前は其良心に對しては忠實だらうな。



女、勿論ですわ。ですから妾は妾の爲度い放題な事をそれに從つてしてゐるのですわ。

男、そうかしら。お前は俺がお前の良心に入り込んでゐることを認めない風をした。そしてお前の良心に從つて勝手なことをすると云つた。しかし事實お前は俺の妻として俺と恁うして同居してゐる。それもお前が只一つの良心に從つて何等の矛盾なく執つてゐる行動の一つかね。

女、ぢや妾に出て行けと仰るのね。

男、ふん、お前には俺の云ふ心持が分らないのか。

女、（冷笑して）分つてゐないでしやうか。

男、そんなら揶揄ふのは止して呉れ。俺はお前を對手に馬鹿巫山戯はし度くない。

女、妾は巫山戯るのが好き。丁度妾が一寸した矛盾を好くやうに。

男、ふむ。お前には興味が全部なのだからな。しかしそれもよからう。巫山戯る女は巫山戯る男よりは未だいくらか見好いものだ。所で俺だつて時によつては隨分巫山

戯ることもある。しかしそれは物事がちやんと安定して後の餘裕だ。

女、ちやんと安定してゐるぢやありませんか。

男、又揶揄い始めたな。

女、(笑ひ乍ら)それはそうと、もう妾達が一緒に同居してから幾日になるでしやう。

男、もう恰度二週間になるよ。だが俺にはそれが何だか昨日から始まつたことのやうにも思へるんだ。

女、まあ未だ二週間しか經たないの?妾はもう一ヶ月も經つたやうな氣がするわ。

男、實は俺もその通に感じてゐるのさ。何しろ之ぢや全く結婚したものゝ共同生活ぢやないんだからな。落ち〻たと思つた日は唯の一日だつてありはしない。

女、だから結婚はしなかつたぢやありませんか。妾達は只知合同士が二人で同じ家に住んでゐると云ふ丈けですわ。それが生憎男と女で、男の方はその女を戀してゐると云ふのですわ。



男、ぢやあ之れからはそう云ふ關係を止めて、新たに夫婦の間柄として同棲しやうぢやないか。

女、そんなことは今始まつた貴方の要求ぢやないぢやありませんか。妾は一體貴方の何でしやう。戀人でしやうか、妻でしやうか。

男、兩方だ。ね。お前は俺に云つた言葉をよく思い出して見るがいゝ。お前は俺を戀することは出來ない。しかし戀しないでよければ俺の處へ來る。そして妻になる。と云つた。

女、若し貴方が目に見えた不幸を耐え忍ぶ心算ならば。そして妾からの侮蔑や冷遇を甘んじるならばと云ひました。

男、兎に角吾々二人はそう云ふ條件で、式こそ擧げなかつたが、事實結婚したのだ。だからお前は俺の妻ぢやないか。

女、えゝ、名義ではね。しかし事實は妾は一度も貴方の妻だ抔と自分を思つたことは

ありませんわ。什うしてそう思へるでしやう。

男、（落付いて）お前は案外正直な女だな。

女、なあぜ？

男、約束を破らなかつたからさ。

女、正直で親切だわ。

男、しかしお前はその約束を破らなかつたと云ふことを後悔してゐるだらう。

女、えゝ、實は昨日あたりから。

男、始めからではなかつたね。

女、えゝ、妾そんな馬鹿な犧牲は拂いませんわ。

男、一つ生活を變へて見やう。獨身の單調な生活に倦んでゐたお前はそう云ふ惡戯氣な好奇心から俺と同棲して見るのも一寸面白からうと思つたのだね。

女、まあその位の處でしやう。どうせ一時的だ。せい〳〵永延びて二週間位のものだ



らうと思へましたからね。

男、（少し皮肉に）そうだらう。しかしお前も隨分向ふ見ずな冒險をやつたもんだね。

女、えゝ、其位の好意は貴方にあつたの。それはほんと。つまり事によると二週間が三週間位に迄はなるかも知れないと云ふ。

男、（冷靜に）それは喜んで籠の中に入つて來る小鳥の運命と同じことだ。成る程俺は當分の間兎も角も俺と同棲して見るがよからう抔と始めには云つた。しかし其當分の間と云ふのは云ふ迄もなくあの時の俺の口實だ。それ位の俺の計畫がお前に分らなかつたとなると……

女、妾は餘つ程馬鹿だと云ふんでしよ。つまり貴方は妾を無理にも掠奪する心算だつた。處が生憎貴方の竹細工の籠は妾のやうな鐵の翼を持つた鳥を圍んでおくには少し弱過ぎた譯なのね。妾と云ふ鳥は毎日朝から晩迄こうやつて樂に籠から拔け出して彼方此方飛び廻つて居る。そして貴方は側でそれをぼんやり手を束ねて見てゐて

別にどうする事も出來ない。

男、いや、それは只俺のお前に對する愛が盲目過ぎたからだ。つまり俺はお前を甘やかし過ぎた迄の話だ。實は俺がほんとうにお前を掠奪しやうと決心したのはたつた今のことだ。お前は毎日俺がお前の出掛けるのを禁制し得ないと云ふことに圖に乗つて無暗と出歩いてゐる。それは俺達が一緒に生活する以前より猶ほ盛んらしい。と云ふのも實はお前が出歩くことが好きだからだと云ふよりも、妾は迚も恁んな愚鈍な男には滿足出來ない、こんな男と一日迚も一緒に暮せはしないと云ふ輕蔑の意趣を露骨に俺に表白する爲めに、それ程出歩き度くもない時に迄御苦勞樣に出掛けることによつて俺を不快がらせると云ふ、そのことに興味を感じてゐるのだと云ふことも俺が知らないとお前は思つてゐるかね。

女、ですからね。もしも貴方がそれ位のことに迄氣が付かない程のお馬鹿さんだつたら妾は何も二週間だつて貴方の側になんぞゐて上げるやうな親切氣は持てなかつた



でしようと云ふの。貴方は恁う云ふことを知らない？戀と云ふものは自分自身に自から起つて來る偶然のもので、報酬的に起り得るものでないと云ふことを。だから戀の場合には恩を被せると云ふことは絶對的に出來ないんですよ。しかし妾は貴方に向つて恩を被せることは出來るの。何故なら貴方は妾を戀してゐるけれど、妾は貴方を戀してなんぞゐないんですからね。お氣の毒だとは思いますが、これも妾の意志ぢやないんですから仕方がありませんわ。……あゝあ二週間。隨分長いこと妾も貴方に親切を盡したことね。これこそほんとうの恩ですわ。

男、あり難ふ。だがその二週間が二年にならうが、二十年にならうが、もうお前は二度と再び元との棲へ戻ることは出來ないのだ。お前は俺の忠實な妻として俺と一生を共にすべく生れた女だ。

女、（男の辭に頓着せず）貴方はだから何故妾と一緒にゐる間妾の奴隷のやうにして活きて行かなければならないかと云ふことが分つたでしよ。つまり妾は貴方に最も大きな

恩を施してゐる。貴方はその恩に比敵する何物も妾に供給することが出來ずに、只その恩を喰べて生きて行くと云ふ點で。妾は何も昔の暴君のやうに奴隷なんぞ欲しくはありません。しかしもし貴方が妾から自由にならうと思ふならば貴方は妾から去られなければならない。處が戀に壓し倒されて腰の拔けた貴方は迚も妾から自分の力で離れる勇氣はない。妾に捨てられる位なら未だしも妾の奴隷でゐる方がましだ。こう内心思つてゐるでしよ。だけど妾だつて實は中々貴方に同情があるのよ。妾は貴方を一生奴隷で腐らして了ふのを見るに忍びないの。ですから妾はもう貴方から別れて上げますわ。それが貴方の爲めにいゝと思ふから。恰度妾に逢はない以前に貴方か貴方一人で立派に活きてゐられたやうに、之からも寂しいなりに活きて行けるでしよう。ね。それが貴方の運命だわ。貴方は可哀相な人ね。

男、(暫くして)うむ。俺は可哀相な人間かも知れない。しかし只可哀相許りの人間ではない。お前は、俺の爲めに俺から別れやうと云ふ。しかしその心は只お前が俺を恐



れてゐるが爲めに俺に飽きたと云ふ風を衒つた迄に過ぎない。まあしかし俺は今迄お前のそう云ふ我儘な性質に惚れ込んで來た。だが道は俺がお前の奴隷で一生通すか、それともお前から別れるのか二つしかないとお前には思へるかね。が、俺にはお前がも一つの道を俺が取ることを豫知してゐるが爲めにそろ〳〵俺から逃げ仕度を始めたと云ふことが分つてゐるんだ。俺が籠の中に喜んで入つて來る小鳥の運命だとお前の向ふ不見を笑つたのはその點だ。俺は今が今迄態とお前の愛に曳かされて竹細工の籠しかお前に當てがつておかなかつたと云ふよりも、實は只籠の蓋を開け放しにしておいてお前の得意がつて飛び出す笑顔を見て慰むより仕方がなかつた。お前はそれを自分に鐵の翼があつたからだと自惚れてゐる。だが人の好い俺ももう何時迄も手を束ねてお前の盲目滅法な專横を宥しておく譯には行かない。俺は方針を更へた。お前のやうな女に對する俺のやり方は間違つてゐた。だが俺は愈々第三の道を取ることを餘儀なくされた。これからは俺がどんな人間だかと云ふことを露

き出しにお前に見せ付けてやらう。

女、（微笑し乍ら）妾の暴君にならうと云ふのね。面白いわ。なれるならなつて御覽なさい。お互に本性を發輝しましよう。人間は本性を發輝する時に一番見て居て面白いから。

男、俺にとつては本性も僞性もない。どれもこれも本性だ。だがそんなことは什うでもいゝ。兎に角之から俺はお前の奴隷から一躍して暴君になる。明日から此處は牢獄で、お前は囚人で、俺は牢番だ。いゝか。もう一歩だつて俺はお前を此室から外に出しはしない。

女、（媚びるやうに）妾貴方が少し可愛くなつて來たわ。貴方が本物の奴隷であつた間、貴方の顏や風采はそれは澁臭くつて迚も見られたものぢやなかつてよ。だけどこれから貴方は暴君に出世した心算でゐればもう少し晴々した風采に上るでしよう。處で妾は什うでしよう。貴方は妾の暴君的な性質に自分の性質と調和するものがあると



思つて一つにはそれに惚れ込んだんでしよ。そして妾の暴君的な顏を女王のやうに美しく崇めたんでしよ。えゝ妾は生れつき女の暴君よ。そして暴君である時にのみ妾であり、從つてその時にのみ妾は美しいでしよう。つまり何のことはない。妾は上から見れば醜くつて下から見上げてゐさへすれば何時も美しい山のやうな女ですわ。妾は奴隷になれる女でもないけれど、妾を妾隷の心算で貴方が上から見やうとする時、妾はもう妾ではなくつて、賤しい、本物の奴隷よりも醜い、取り柄のないそして最も不快な代物にしかならないと云ふことが貴方には分らないんでしようか。そして其爲めに貴方が愈々不幸にしかならないと云ふことが分らないんでしやうか。

男、分つてゐるさ。しかし止むを得ない。元と〳〵最上の幸福抔を望むことは出來ないと觀念してゐる俺にとつてはその不幸さへも一番輕い不幸なのだ。ね。俺達は互に暴君同士だ。暴君同士であればこそ俺の氣に合いもしたのだが、又同時に和合する譯にも行かなかつたのだ。そうかと云つて俺は何時迄もお前の奴隷でゐる譯にも

行かない。俺の運命の擴がりはお前のよりも大きい。其俺の運命がお前の運命の足下に踏み躙られて死んで了ふことは吾々二人の運命以上の運命が承知しない。

女、(小さな欠伸をする)あゝ眠い。

男、(苦笑し乍ら)ぢや寢たらいゝだらう。俺も寢る。寢床の上でも充分話は出來る。若しなんなら又明日してもいゝ。

女、貴方先きに寢たら什う?もう議論なんぞ止しにして。

男、ふむ。お前が少しも眠むくない處ではないと云ふことは俺にだつてちやんと分つてゐるさ。只お前は俺の云ふことに少し恐迫を感じると同時に、それと眞向(まとも)に抵抗する勇氣と自信とが持てないことを自覺した爲めに只眠いと云つてそれを茶化して見せた迄のことさ。俺はもう何遍もそう云ふ目に會つてゐる。

女、(冷淡に)そうよ。

男、(やさしく)だが俺はお前と口論をしたり、又はお前に向つてケチな可厭がらせを云



つたりすることは實は此上なく嫌なのだ。それはお前にも分つてゐて欲しいのだ。處で一體暴君同士で互に妥協すると云ふことは出來ないものだらうか。

女、(少し乘り氣になり)そう。實は妾もそのことを考えて見たことがあるの。でかうしたらいゝでしやう。つまり今日は妾が貴方の主人になる。其代りに明日は貴方が妾を召婢にする。明後日は又貴方が下男になると云ふ風に毎日代りばんこに權力の持ち合いをしたら。

男、(賤しく苦笑し乍ら)何だつて?

女、(得意氣に微笑み)貴方は心の中では甘いことを云つて呉れたと思つてすつかり喜んでるんでしよ。そう顏に書いてあつてよ。

男、馬鹿な。そんな子供だましのやうな氣まぐれの串戲を俺が眞(ま)に受けて、それが實際に出來ることか什うか抔と考えて見る程の馬鹿だと俺を思ふかい。

女、(眞面目臭つて)いゝえ。決して串戲ごとぢやありませんわ。貴方さへそれで一言「う

ん」と承知する心算なら妾は明日からでもそれを實行して見せるわ。

男内心の當惑を充分に隠しきれぬ賤し氣な眼付きを以て無言の儘暫く女の顔をジッと凝視めてゐる。男の顔は段々熱して來る。女見兼ねて一寸噴き出す。そして慌てゝ甘へるやうな表情を以て男の顔を眺める。

男、（飛び上り）何と云ふ可愛いい奴だ、お前は。

女を抱いて接吻しやうとする。女それを突きのけて起ち上り、男を睨みつけ乍ら机の上の手提げを取る。男慌てゝ扉の錠を卸す。女苦々しく笑ふ。

女、未だ窓が二つ開いてるわ。

男、此處は二階だ。飛び降りれば下はタ、キだ。

男、興奮して室の中を行つたり來たりしてゐる中に何氣なく机の側を歩き、氣が付かぬやうに筆立ての中に鍵を落す。女鋭くそれに注意して居乍ら氣の付かぬやうな風を裝つてゐる。そして落付いて椅子に凭り、ハンケチで顔を煽つてゐる。やがて煙草を取り



女、（甘へるやうに）煙草は什う？

男、（立ち止まり）うむ。一つ貰はう。先刻から未だ一服も吸ふ暇がなかつた。

女マッチを擦つて男に火を與へる。

男、（一服喫かし乍らジロ〳〵女の顔を眺め）什うしたんだい。大變珍らしいことをするぢやないか。

女、（無頓着に）少し熱過ぎるわ。其方の窓を少しお開けなさいな。今風が少し止んでるから。大丈夫よ。妾逃げなんぞしないことよ。

男、（一つの窓を三分の一許り開ける。やがて）俺が昨夜お前にキスしたことをお前は知らないだろ。

女、知つてるわ。貴方は毎晩妾の寢顔にキスしてるんでしよ。全で色魔の泥棒見たやうに。

男、（女の側に腰を掛け）お前が覺めてゐる時はうつかり出來ないんだから止むを得ない

さ。何しろ昨夜はい〻月が青白く吾々二人の寢床の上を照らしてゐた。俺は三時頃ふと眼を覺まして月に照らされてゐるお前の顏を見た。お前は胸迄乘り出して晝間の荒くれた本性に似ず、如何にも殊勝な、つゝましやかな女らしくすや〳〵と平和に眠つてゐた。何だか眠つてゐるやうでもあり、又眼を開いてゐるやうにも見えたつけ。で、俺は始め長いことお前の唇にそうつとキスした。それからお前の胸に俺の額を喰付けた。そして心の中に色々のことを祈り乍ら靜かにそれをお前の乳房の方へずらした。そして俺はお前の乳房の處を少し開けてそのむつくりと脹らむだ先を舐つたのだよ。何だか子供の時阿母さんの乳首を舐つてゐる時と同じやうないゝ心持だつた。しかし若々しい健康にはち切れたお前の乳首の甘い味は迚も〳〵阿母さんの處(どころ)ではなく、噛み度い程美味かつたよ。(女笑ふ)俺はだけどそれを舐り乍ら一層のこと一噛みに噛み切つて了つたらとも思つたんだ。そして其先からどく〳〵と血の迸る樣や、お前の狂い苦しむ樣を想像して見たりしたよ。しかし俺は暫くして其乳房



をチャンと又襟の間に收つて、お前の美い規則正しい眠息をその儘そつくり長いこと吸い込んでは吐き、吸い込んでは吐きした。胸の奥迄深く〳〵な。何だか胸が芳い香で一杯になつて體中がすうつと透き通るやうな、むせ返へるやうな感じがした。ぞこ〳〵するやうでもあり、温いやうでもあつた。お芽出度い話さ。だが俺は仕舞にも一度お前の唇や、薄く閉じた可愛い眼に接吻した後でお前が風邪をひかないやうに首の處迄そうつと夜具をかけてやり、そして俺はお前の脇の下に頭を突込んだなり再び眠入つて了つた。實は俺は態と緊く接吻してお前を起してやらうかとも思つたのだが、夜中に又一騷動するのも面倒だと思つて止して了つたんだ。だが今夜は起すかも知れないぞ。

女、(露骨に輕蔑の表情を以て)そんな處も貴方のいゝ一つの本性ね。

男、だから面白いだらう。しかしまあそんなことを云ふ必要もないさ。俺は只俺が始終お前の心や運命をキスしてゐるやうにお前の肉體もキスし度かつた迄だ。それに

しても俺が若し本統にお前の戀する男だつたらこれ位の本性もお前にとつて決して嬉しくないことにはならないのだからね。だがお前はいくら俺を耻知らずだとか色氣狂いだとかと云つて輕蔑して見せたつて俺にはお前が實は俺を輕蔑してはゐない。寧ろ内心ある尊敬を以て畏れてゐると云ふことが分つてゐるのだ。お前は錫を銀と見違へる程馬鹿な女ぢやない。だからお前には本統の銀をいくら錫に見やうと思つたつて見られはしないのだ。それは俺には分つてゐる。又お前がそんな馬鹿な女だつたなら始めから俺はお前に戀なんぞしやしなかつたらう。だから俺はお前が輕蔑と云ふ言葉を使ふことに對しては始めから安心してかゝつてゐた。俺には其位の自惚は什うしたつて自然持てるのだから。俺はお前の口先の侮辱を甘んじても俺と結び付けることによつてお前の運命に幸福の光を點じてやらうと思つたのだ。又思つてゐる。何故と云つてそれは俺の義務だと思へるからな。

女、へえ、大層體裁のいゝ義務だこと。利他的でね。



男、うむ。俺はお前と同じやうにエゴイストだ。只お前と異ふ處はお前のは利己が利己にのみ畢つてゐるが、俺の場合では利己は利他となり、利他は利己となる點だ。

女、いゝえ妾の云ふのはね、そんな結果に就いて云つてるんぢやないんですよ。貴方が見え透いた利己の動機を持ち乍らそれを如何にも利他的な目的でやつてゐるやうに思はせ振りをする處が可笑しいと云ふんですよ。

男、では判きり云はう。俺はこれからお前に對しては徹頭徹尾利己的にやる。俺の都合のいゝやうにばかりやる。そしてお前の自由を束縛する。俺はお前の全部、體も、意志も、運命も、凡て皆俺の所有物にする。そしてその結果はお前の幸福となるのだ。

女如何にも蔑むやうな表情を以て暫く男の顏をジツと視てゐる。やがて嘲弄的な口調で。

女、一寸。失戀とは一體どんなものなの？

男、へむ。お前は中々惡戯を器用に應用する女だな。

女、貴方が餘んまり樂天家的な顔をして虫の好いことばかり云ふから、妾もつい惡戯がして見度くなるのですよ。一體男と云ふものは女に逢いさへすれば向ふ不見にもう只無暗とお前の運命がどうのこうのとえら相な理屈を口にさへしてゐればそれでいゝものと先入主的に思つてゞもゐるやうね。それが滑稽だわ。何が運命と云ふものだかてんで解りもせず、自分一人の哀れな運命さへも背負い兼ねるやうなやくざものに只運命と云ふ辭を使ふことだけを知つてゐるからと云つて、此方の二つとない運命迄を易々と安心して渡して了ふ女の運命こそ蛾の背中に乘つて飛行するよりも頼りない譯だわ。

男、處が蛾の背中には矢張り蛾か蝶々位しか止まらうとしないからうまく出來てゐるのさ。下には下があるからね。やくざな女にでなければやくざな男の背中なんぞを頼りに出來るものぢやない。處でお前は何時か俺がこう云ふことを云つた時にそれ



を賛成したことを覺えてゐるか。

女、どんなこと?

男、つまり世の中には人の尻馬に乘るか、流行に浮かされるかして絶えずわや〳〵と騒ぐ事を生命としてゐるモッブと云ふ奴等がゐる。そう云う奴が女なら女に興味を以て向ふと、口先き丈けではイヤにコケ威しに人の運命を口にしては自分の身にもつかない豪相なことを述べたてるものだ。處でそう云う野次馬は素と〳〵自分自身の肉や血で對象に對つてゐるのでなくて、强者は斯く〳〵の場合にはかくあるべき筈と云ふ借り着の概念をして對抗せしめてゐるのだから、其概念と矛盾した對手の否定に逢へばさらりとそれから引き擧げて了つて恰かも自分はあの女の配過者となるには少し偉ら過ぎた、あの女は救はれない、俺はあの女を征服したと云ふやうな得意氣な顔をして悔む處がない。しかし勿論そう云ふ無責任な、反省力のない浮はついた手合は本統な自分の骨身を以て物に當ることがないから、對手の眞の運命が

どうならうと苦しむこともない代りに、又決して生長することも、戀を經驗することもないのだ。で俺がもしそう云つた、ほんとうに蟲の好い樂天的なモッブだつたら、つまり他の言葉で云ふと本物のカリカチュアだつたらだ、半年は愚か、お前に戀を打ち開けて彈ねつけられた始めの一回か二回でもうあつさりとお前を捨て去つてお前を輕蔑しぬいた風を裝つたに違いない。しかし俺かこうして未だお前を對手に恰度カア〳〵としか啼き方を知らぬ馬鹿な鳥のやうに何遍となく同じことを半年餘り繰り返へして散々お前に侮辱され乍らも猶ほ止むなくお前に引つかゝつてゐる。お前の運命に祈りの心を以て貝のやうにしがみついてゐる。其俺の心持の價値が分るかとお前に訊いて見た時お前は分ると頷いた。それさ。

女、へえ、大變長い理屈だつたのね。妾は其時々々で隨分口から出任せを云ふから什んなことを云つたか一々それを覺えてはゐないわ。處で失戀とはどんなものですよ。



男、ある詩人は失戀は成功した戀よりも甘いものだと云ふやうなことを云つてゐる。しかしそれが甘いか辛いか位のものであればそれは笑つたり涙を流す位の處で濟める。それは甘い酒を飲んで誰も額に八の字を寄せるものがなく、辛いものを舐めると自(おのづ)から涙が出る位のものだ。しかし人間全體が頭となく胸となく堪えられない苦しみに爆發し相になるのを堪えなければならないと云ふやうな心持を經驗する時、それはもう詩的な甘味があると云ふやうな離れた餘裕を味つてはゐられなくなる。唯もう無暗と痛ましく苦しい。失戀の味はそんな風だ。

女、(面白相に)たまらないわね。

男、譬へて云ふと今迄青い色で流れて來た川が今度は灰色の川となつて流れるやうなものだ。色は希望が未だある時よりも褪せて陰鬱だが、川は同じやうに永遠に流れる。失戀で戀の結果が付くものならばそれは少しも苦しいものではない。處が失戀が最も悲愴なものである理由はそれが戀の死滅でなくて重傷であり、結末でなくて

大頓挫であるからなのだ。（男。涙ぐむ）

女、（始め少時く同情したやうに默つてゐたがやがて）失戀をした男がその失戀をさせた女に對つて失戀の講釋をするなんて隨分珍しい現象だわね。

男、（泣くやうにせゝら笑ひ）しかし骨折り損でもないよ。俺は可愛いお前を獲たのだ。

女、と云ふ時に貴方の心持には何處か甘い處もありはしない？妾には失戀は痛し痒ゆしのやうなもので何だか甘相な氣がするわ。何故ならばそれは辛いから。

男、甘いか辛いかそんなことは俺には解らない。唯此苦しみはお前には解らない。しかし俺はそれを強いてお前に解つて貰はうとも思はない。お前は快活でゐるがいゝ。お前はほんとに可愛いゝ奴だ。

女、（笑い乍ら）貴方は何時でも妾にてこずるとは全でそれが唯一の遁げ辭でもあるかのやうに「お前は可愛いゝ奴だ」と外云はないのね。貴方も可愛いゝ好い兒よ。



男、（赤面し乍ら）何？可愛いゝ好い兒だつて？

女、（甘やかすやうに）そんなに嬉しいの？

男、うむ嬉しい。什うか可愛いがつて呉れ。永く〳〵見捨てずにな。

女、（勝ち誇るやうに笑い）先刻の見幕は何處へ行つたんでしやう。

男、帝王に迄なれる人間の素質には又奴隷に迄成り下れる一面があるよ。……しかしお前に逢はない以前の俺に今のこの情けない狀を見せたら嘸ぞ驚いたことだろうとは思ふね。（女の顏を下から見上げ乍ら）それにしても全くお前はそんなに勝ち誇つて見へる時にどうも殊更綺麗なのが奇しい。實際お前の云ふ通りだ。

女苦笑す。暫く沈默。

女、一生帝王でゐらつしやい。

男、そんなに俺が厭か。そんなら今お前が俺を可愛いゝと云つたのは嘘だね。……

そんなことは勿論分つてゐるが。

女、什うせ妾達は嘘の吐きつくらをしてるんだわ。貴方だつて先刻妾が此處へ來てからもう何遍嘘を吐いたでしやう。ですけどね。妾の云ふことは大抵後から云ふこと程ほんとうだと思つてゐれば間違いはないわ。

男、しかし始めほんとうのことを云つておいて後で嘘を吐くこともあるだろ。

女、えゝ。又一度嘘を吐いたなりで放つたらかしておくこともあり、又一つ〳〵ほんとのことを云ふこともあるわ。しかしそんなことは……

男、戀人にでも向つた時でなければか。

女、戀人にだつて嘘は吐くわ。其方が却つて本統で親切なことがありますもの。

男、だがほんとにお前は戀人を持つてゐるのか。お前は男にとつては仕事が唯一の使命で、女にとつては戀が唯一の運命だと云ふ説を輕蔑してゐたね。



女、そう云ふ説を輕蔑する妾には戀が使命としてゞも、又一生の運命としてゞもなく起つて來るやうな時がないでしやうか。

男、俺にはそう云ふ一生の運命としてゞない戀は戀でないと思へるが、しかしまあその男は一體什んな男だ。そんなことを聞いたつて今更始まらないとは思ふが、何だかそれを聞くことが俺の義務でゞもあるかのやうな氣がするのだ。

女、又始まつてね。まあ當てゝ御覽なさい、什んな男だか。

（風の音烈しくなり、窓より吹き込んでランプを消し相にする。男起つて窓をしめ又座に就く。）

男、大抵分つてゐるさ。要するに其男は正直と云ふ點で俺に似てゐるが、俺よりもずつと馬鹿で、意氣地なしで、お前の云ふなり次第になる、一言で云へば極く平凡な金持の息子位の處だろう。

女、（冷笑的に）よく當ること。

男、ぢや、矢張り當つてるんだ。

女、（笑ひ乍ら）何れ後で會つた時に分るでしよう。
男、なんだ其男が後で此處へやつて來るのか。
女、えゝ、もう暫くたつと來ます。
男、ふむ、お前は先刻から上被を脱がずにゐて、手提げを持つて、今夜から俺と別れやうと云ふのだな。
女、今頃それに氣が付いたの？
男、今頃それが分つたのなら何も俺は扉の錠抔を卸しはしなかつたさ。しかしそんなら何故お前は今夜態々此處へ歸つて來たのだ。俺には實はそれが先刻から不思議でならなかつたのだ。お前が俺に別れを宣告しに來た場合には俺が如何なる手段に訴へてもお前を手離すまいとする位のことが什うしてお前には分らなかつたらう。それは好んで係蹄（わな）にかゝりに來たと同じことだ。
女、だから貴方は什の位自分が暴君になれるか試めしにやつて見ればいゝぢやありませんか。



（間）
男、うむ、其暴君と云ふことに就いて今俺は一言云い度いと思つてゐたのだ。實は俺は生れ付き暴君ぢやない。暴君と云ふのはお前のやうに自分が其上に專横を恣にすることの出來るやうな自分以下の力のない人間をばかり對手にして樂む奴のことを云ふのだ。今お前が戀人と云ふ名を使つた其男に對するお前の關係抔が即ちそれだ。處が俺のやうな人間は始終自分と對等な力のある人間か、でなければ自分以上の力をばかり對手にして進んで行く。だからそう云ふ人間は征服はするが暴君にはならない。又それにしては餘りに勉强家だ。征服がし度い癖に其力のない弱者や、身分不相應な欲望を持て餘してゐる怠け者に限つて兎角暴君になるものだ。
女、（嫌な顏をする）兎に角貴方は妾に對して暴君にもなれず、かと云つて征服も猶更出來ないとなると見す〳〵妾がその男と一緒に出て行くのを見送るより外に仕方がな

くなつた譯ね。

男、しかし此場合は止むを得ない。俺は飽く迄もお前を此處に引き止めるさ。

女、そんなことが貴方の力で出來るもんですか。

男、いや出來る。しかしお前は一體何の心算で態々此處へ歸つて來たのだ。まさか俺を揶揄いに歸つて來ると云ふ勇氣もお前にはない筈だし、それに縱令お前が行衛知れずになつたとしても俺がそれを警察沙汰に上(のぼ)しもしまいぢやないか。

女、妾が此處へ今夜歸つて來たのには簡單な理由しかないわ。それは兎も角も先づ貴方との片をキッパリ付けておいた方がいゝと思つたと、それから貴方に妾の男を明ら樣に紹き介はしておいて誤解から生ずる後々の厄介を防ぐ爲めと、も一つには此手提げを取りに來たのです。それに荷物の仕末もしなければならないし。

男、それ丈けか。

女、そうね。もしあれば貴方をも一目見ておき度かつた位の處でしよう。



男、怖わいもの見度さと云ふ風にか。しかし俺にはお前の所謂情夫なるものがお前にとつて實は何でもない只の人間で、唯此場限りの俺との恐ろしい離別の申し立てにする、つまり間に合はせの緩衝機(バッファー)としての傭人に過ぎぬと云ふことが分つて來た。その男はお前には戀人でも何でもない。俺の察する處によると其男は多分主人からの借り着でも着込んだCかDの家の給仕か執事位のものだらう。

女、(思はず顏を赭らめ)恐らくそうでしやう。

男、お前が晝の間にでもCかDを通して今晩十一時頃に其男が此處へ來るやうな手筈にしておいたんだ。(間)いざとなると何と云つたつて女と云ふものは弱いものだ。ある後ろ楯での力なしにかう云ふ場合に自分一人では臨み得ないのだ。そうして其後ろ楯てとなるものは何時も男に決まつてゐる。……そうだ。Cのやうな可厭な奴に使はれてゐる小使さへも時として單に男であると云ふ處から其後ろ楯の役を務め得るのだからな。俺の云ふことはよく的るだらう。

女、勿論其男は妾にとつて戀人でも何でもありません。又必ずしも何かである必要がありません。妾に縱令本統の戀人があつたとしても妾は今此場合に必ずしも其男に此處へ來るやうにとは賴まなかつたでしよう。其必要がないからです。何故と云つて妾に戀人があつたとして其戀人が貴方に對して持ち得るやうな權利は妾自身に既に充分與へられてゐるのですもの。即ち妾が貴方を少しも戀しない。妾の獨立的な自由な意志は貴方のやうな人間の妻となることを欲しない。それ丈けの理由で充分妾は貴方を捨てることが出來るのですから、何も妾が他の人を戀してゐるから、そして其戀人は妾の運命に最も多くの交渉をなし得る權利を持つてゐるから抔と、そんな重もだつた第三者の資格を持ち出すにも及ばないのです。のみならず事實妾は戀人を一人も持つてゐません。又之から先も持たないでしやう。貴方の云ふやうな意味の戀は第一妾の性に合はないのですから。そして今此貴方と差し向いの場合に最も妾に必要なものは何でしやう。つまる處は……露骨に云ふと、單に貴方の方



の萬一の暴力に備へる爲めの妾の方の武力と云つたやうなものではないでしやうか妾は權利としては自分一己の力で充分貴方に對抗することが出來ます。しかし妾が貴方に對して持つてゐる弱味は畢竟此場合只貴方の腕力(うでぢから)が妾のよりも強いと云ふことだけではないでしやうか。ですからそれに備へるにはDの處の小使で充分なのです。丁度荷作りの世話も賴む事が出來ますし。

男、(失望しつゝ憤慨して)ふむ。其奴に籠の穴のつつかへ棒をさせるか。

女、えゝ。まあそう云ふ譯です。其の男は緩衝機(バッファー)と云ふよりも單につつかへ棒に過ぎません。貴方の暴力ではへシ折ることの出來ない丈けの丈夫なつつかへ棒を籠の穴にかつておきさへすれば何も妾が自身に鐵の翼なんてそんな面倒な厄介物を持つてゐる必要はない譯でしよ。少くもこんな野暮な場合に用ふる意味に於てはね。で、妾はこの儘で樂にその穴から出て行きますよ。

男、(怒つて)馬鹿！何と云ふ簡單な獸だ、お前は。

女、（冷やかに）いくら貴方が青筋を立てゝ怒つたつてもう無駄ですよ。あの男は至つてお人好しで少しお芽出度いんですが力は貴方よりも強相ですわ。ほんとにこんなつつかへ棒なんぞの入要な場合には男は重寶なものですよね。

男、（むしやくしやして）あゝ俺はまあ何と云ふ馬鹿だつたらう。こんな禽獸同樣な女に眼が眩んだとは。よく〳〵お前には俺が解らないと見えるな。

女、そう云ふことを貴方が云ふから同じやうなことが鸚鵡返へしに妾の方からも云へるのです。しかしお互に失望して輕蔑し合つて別れて了へばそれが一番いゝじやありませんか。

男、馬鹿。そう簡單に行くものか。お前はそうさせようさせようと態と努めてゐる。だが俺がお前に失望し、お前を輕蔑してゐるのは今に始まつた事ぢやないんだ。

女、御同樣です。

男、嘘を吐くな。お前は俺を輕蔑し度がつてゐ乍ら事實出來ない。それがお前には強



腹なんだ。そしてお前は俺に飽きて來たと云ふよりも俺から妙に壓迫を感じて來たが爲めに、態と俺の敬虔なお前に對する戀を意趣返へし的な茶番に弄んで、それを見收めの見物にして離れやうと企てたんだらう。しかしかう萬事が判きりして了ふと今來やうとしてゐる男の役も恐ろしく間の抜けたものになつて了つた譯だな。

女、什うせ間抜けな男が間抜けな役を演じるんですからそう間が抜けても見えないでしやうよ。しかしいくら間が抜けてゐても貴方は其道化の上は役に立つ役には行かないでしやう。それにしてももう貴方が妾の側にゐられるのは僅か數分間の間です。お別れに葡萄酒でも取り寄せて飲みましやうか。

男、へん。切りと扉を開けて貰い度がつてゐるな。鍵は俺のこゝに入つてゐる。（上被の隱しをたゝく）生憎だがそれを今お前に渡すことは出來ない。だが其男が來る迄に俺がお前を殺して了つたら什うだね。

女、（蔑むで）貴方も殺されて了ふ丈けの話ぢやありませんか。

男、なあに殺されるとは限らないさ。

女、貴方は妾に侮辱されて捨てられて了つても死に度くはないの？

男、馬鹿な。誰が貴様の爲めになんぞ死ぬものか。しかしお前は俺から見捨てられゝば死んだも同様なのだ。だが俺を捨てゝ貴様は一體什うする心算なのだ。

女、（諧謔的に冷やかに）貴方の所謂墮落に飛び込んで行く丈けの話です。

男、えゝ。そんなことをかりそめにも俺の前で云つて呉れるな。そんなことを聞くともう俺の胸は裂けるやうだ。

男起ち上り室の中を歩き廻る。其眼には涙が輝いてゐる。やゝ長き間。

女、（落ち付いて懇ろに）お聽きなさい。妾はこう思ふの。もし釣合と云ふことが何よりの戀の條件となるものならば貴方と妾とは恐らくいゝ夫婦になれたでしやう。しかし戀にとつては釣合は問題でなく唯調和と云ふものが何よりの條件です。妾と貴方とは或は釣合つた二人だつたかも知れません。しかし調和する二人ではありませんで



した。ですから貴方が妾の方にこゞんで來れば來る程妾は自づと後ろに背り返へるやうになつたのです。しかしそれは妾の意志でした譯ではありません。

男、實際だ。恰度俺がお前の方にのしかゝつて行つたのが俺の意志でなくて運命の意志であつたのと同じだ。（女に近い椅子に腰を卸し愛の溢れた眼を以つて）全く俺はもう少しお前が俺と調和出來る女だと思つてゐた。しかしもう今の俺にとつてお前と俺とが何の位迄調和するかしないか抔と云ふことは問題でなくなつてゐる。俺はお前と云ふものに眼が眩んで何が何だか分らなくなつてゐる。そしてお前はもう只失ふことの出來ない俺にとつての絶對的必要物としか見えない。しかし不調和なら不調和でもいゝ。その不調和から更に大きな調和を生み出さうではないか。俺は梵鐘の響きの中に他愛なく吸い込まれて了ふやうな鈴の音の調和を以て滿足出來る男ではない。俺はお前がそんな鈴の音のやうに影の薄い女でなかつたればこそお前を戀しもしたのだ。お前は俺と同じやうに聲高く自分の梵鐘を鳴り響かし得る強い女だ。俺が自

分の鐘を力強く、突けばお前もお前の鐘を負けずにたゝき鳴らす。だから二人の響の混合は一寸騒音のやうに聞こえる。しかしその音が暫くの間に何時しか相共鳴する和音（ハーモニー）となる時その和音は如何なる和音よりも大きく、美しく、そして深い音響として力強く全世界に鳴り響くだらう。俺はそう云ふ調和を希望してゐる。お前も什うかそれを希望しては呉れないだらうか。

女、（笑ひ乍ら）希望するかも知れません。

男、え？串戯は止してお呉れ。お前は實に美しい力、力強い美の權化だ。

女、（甘やかすやうに笑ひ乍ら自分の膝をたゝき）此處に突つ俯なさいな。

男、女の膝に突俯し、その胸に抱き付いて默禱す。男の體わな〳〵と顫ふ。其間に女右手を後るの方へ延ばし、机の上の筆樹ての中より鋏を取り出す。男程なくして頭を擡げ、それに氣が附く

男、取つたな。

女、えゝ取つてよ。（間）是非妾が取つておく必要も無いけれど又後で餘計な面倒が起



ると厄介だから。

男、（暫くジッと女の顔を凝視めた後で）什うしてもお前は俺を捨てる氣かね。

女頷く。

男、しかしそれにしても何も今夜に限つた譯でもないだらうぢやないか。此風の烈しい夜更けに。

女、いくら風が強くつても、夜明けになつても、妾は一旦思い立つた事は必ず通します。それにもうこゝ迄話が進んだからには妾は猶更可厭な思いをして此家に止まつてゐる氣にはなれません。妾はもう一刻も茲に居ることは可厭です。

男、しかしそれは可笑しな話だ。吾々が此れ位の話（はな）しをし合つたことは何も今夜が始めてぢやない。俺が始めてお前に俺の胸を打ち開けた時既に俺は此位に深入りをした話はしたと覺へてゐる。

女、あの頃妾は貴方に全で冷淡だつたから貴方が什んなことを喋舌つても一向それに

無頓着でゐられたのです。しかし貴方と恁うして二週間も一緒に生活して居る間に妾はそろ〳〵貴方に不快を感じるやうになり、貴方とはもう迚も一緒に居られないと思ふやうになつたのです。

男、そんなことが什うして吾々が共同生活を始める以前に分らなかつたのだい。

女、だから先刻も云つた通り其時分妾は一寸貴方に好意があつたのですよ。實際を云ふと妾は何も貴方との共同生活に對する好奇心ばかりで此處に來たのではないのです。妾はそんな馬鹿ではありませんからね。あの時分妾は自分の生活を變へなければならないと思つてゐたのです。そして妾は内心適當な男を探してゐました。其處へひよつと貴方が來たのです。妾は貴方を一眼見て此男は自分には眼目だと思いました。

男、しかしお前の興味はそゝられた。お前の自尊心はほゝ笑んだ。だがそんなものよりも俺と一緒になる眼に見えた未來の困難や不幸を思ふ恐怖の方が強かつた筈だと



思ふがな。

女、妾がそんな事を考えなかつたと思つてゐるの？しかし妾は兎も角も貴方と同棲して見た上で事によつたらずつと一緒になつて了はうかとも思つたのですよ。其事は妾お別れに先だつて貴方に白狀しておくわ。

男、本當か。併し小供でも出來たらどうする心算だつた。

女、だから妾は自分の決心が定まる迄は貴方に操は任せないと始めに約束したぢやありませんか。

男、しかし俺達はついそれを破つた。

女、俺達なんて云ふのは止して下さい。貴方が獸だつたからぢやありませんか。

男、うむ。しかし俺にもそれは分らなかつたのだ。尤もいくらか恐れてはゐたが。しかしお前にそれが分らなかつたのは馬鹿だ。

女、妾は貴方が餘りえら相な事を云ふのでつい買い被ぶつたのですよ。しかし妾の夢

は水の泡となりました。妾はもうとにかく此處にはゐられません。

男、お前は女以外の領土で俺と張り合はうとしてゐる。それがお前の間違いだ。だからお前は俺に對して一々壓迫と不快を感じるのだ。其上お前は俺から此先き受けるであらう壓迫の恐怖に面と向つた。それでお前は愈々逃げ仕度にとりかゝつた譯だ。

女、大方そうなんでしやう。しかし戀をするものにとつては戀人から受ける一趣の恐怖や壓迫は却つて懷しいものになると云ふ位のことは貴方にも分つてるでしやうね。戀迄行かなくとも責めて好意でもあれば壓迫や恐怖は問題になりはしません……それはそうともうそろ〳〵來相なものだが。

男、そんなことは分りきつた話だ。そしてそれは一般の女か、さもなければ先天的奴隷の場合にのみ云い得る一種の本能だ。處でお前は自分にはそう云ふ壓制に堪ゆる戀の心持を喜ぶ本能が比較的欠けてゐることに妙な自信を持つてゐる爲めに態とそんな柄にもないことを云つて見たりする。しかし俺は頭からお前からの戀は問題と



してゐないのだ。ある人は戀のない結婚は淫賣だと云つてゐる。其言葉に俺は贊成だ。しかし二人の中何れか一方に眞正な戀があればその結婚は決して淫賣にはなり得ないと俺は思つてゐる。だから俺にとつては最早お前が俺を戀する戀しないと云ふことよりは只お前を獲ること丈けが問題なのだ。

女、だから結婚でなくて掠奪をしやうと云ふのでしやう。處が貴方は其掠奪をする最後の力迄をあべこべに妾から掠奪されて了つたんだわ。

女、鏡の處に起ち行き髪の格恰を直す。暫く間。

男、（無理に落付いて）まあ此方へお居で。（女座に戻る）ねえ一體人間は自分に有りつたけの力を出しきつた時に始めて自分の力が何の位しかないかと云ふことを知るのだ。だからそう云ふ全力を盡す人間は自分の力に對してある程度迄の自信が判きり持てると同時に、それ以上の人間や力に對する謙遜の念も亦判つきり持つことが出來る。で正直に云ふと俺はお前と云ふ對象に行き當つた時程明瞭に自分の力を自覺したこ

とはなかつた。俺は全力を以てお前を戀してゐる間にまざ〳〵と自分の木地の人間や力を見せつけられて其前に冷や〳〵と戰慄せざるを得なかつた。しかし自分をも少し強く偉い人間かと思つてゐた俺も、今度露骨に自分の人格の定限と顏を向き合はした時、ぶる〳〵と身震いをして赤面し乍らもジッとそれを眞向に凝視める丈けの勇氣はあつたのだ。

女、つまり妾は鏡となつて貴方が今迄氣付かずにゐた自分の中の弱い處や、醜い處や賤しい處を貴方に示して上げたやうなものだと云ふのでしよ。

男、うむ。お前は俺にとつて人生に對する新しい眼を開けて呉れた大恩人だ。俺は何處迄お前に感謝していゝか分らぬ。しかし俺がお前に逢ふことによつて自分のぼろを示したと思つては間違いだ。何故ならば俺はぼろを持つてゐないからだ。處で俺は自分の現在の力を知つた。そして俺は自分の力が未だ小さいなりにも今でも充分お前には克つことが出來ると思つた。お前も實はそれをよく知つてゐる。しかしお



前の運命を預ることは俺には何となく内心氣後れがしてゐたことは事實だ。それは今の俺の荷にしては何だか少し克ち過ぎるやうな氣がした。

女、そうです。全く克ち過ぎてゐます。

男、しかし俺は「成長」の人間だ、俺は重荷を負へばその重荷に壓し潰ぶされずにそれに堪ゆる丈けの力を何處ともなく搾り出すことの出來る豊富な素質を持つた男だ。だから俺は未來にかけてお前の運命を擔はうと決心したのだ。のみならず又俺は擔はずには措けないのだ。

女、しかし重荷が餘りに重ければ貴方は什うしたつて壓し潰ぶされない譯には行かないでしやう。のみならずそれが背負へる背負へないの問題でないから困つてね。

男、（苦々しく）困る。俺は此「力」の問題を如何なる場合にも第一の條件にあらない筈はないと信じてゐた。處が此場合ではそれが最も貴重なものであることが分つてゐ乍ら、何は扨て措き第一にと云ふ譯に行かないことを知つた。だから俺は力を入れや

うにも入れやうがないのだ。しかし俺は又それを無駄と知りつゝも入れずにはゐられない。それが何より齒痒いゝのだ。

女、妾にも貴方の齒痒ゆさはよく分つてるわ。

男、それが面白いか。なる程お前は俺を弄ぶことは出來る。しかし俺に克つことは出來ない。俺は弄ばれて克つ男だ。

女、妾に弄ばれるのは嬉しくはない？

男、うむ、俺がもし先天的奴隷だつたら。だが俺にも少し條件が許されてゐたならば恐らくお前からの飜弄もまんざら面白くないこともあるまいよ。俺は高みからそれを小供の戯れのやうに樂んで見てゐられるからな。

女、妾はその條件が許されてゐない場合だから猶ほ面白くはない？と尋ねるのよ。

男、うるさい奴だな。だから俺はそんな奴隷ではないと云つたら。

女、うるさいでしやう。だから妾は之から行かうとしてゐるぢやありませんか。



男、それはいかぬ。何と云つてもいかぬ。

女、だから貴方が妾に遣い得る力の性質が賤しいものに變らなければならなくなつたのね。

男、此上ない不名譽な話だ。しかし什うにも止むを得ない。しかし什うか俺にそんな不快な暴力を遣はせないで呉れ。俺は實にそんなことをし度くないのだ。そして此處にもう少しでドもいゝから止まつてゐては呉れないか。

女、（嘲笑って）先刻貴方は妾に當分の間でも同棲して見て呉れと始めに賴んだのはあれは云ふ迄もなく俺の口實ではなかつたかと云ふやうなことを妾に云ひましたつけね。貴方の云ふことに何の信用がおけるでしやう。

男、うむ、俺が惡かつた。實にいけなかつた。しかし俺があゝ云ふことを云ふ自然な心持をよく知つてゐながら態とそれを責めて見たりするお前も餘りよくない。だが俺はもう全くお前を責めることは出來ない。又出來ても爲ない。

女、そんな人を責めない抔と云ふことが貴方に什うして出來るもんですか。

男、いや、少くもこれから俺は誓つてそれを斷行して見せる。

女、だから妾にたつてゐて呉れと云ふの？

男、勿論だ。一體俺位よくお前を愛した又愛するものがゐるだらうか。いやそんなものはゐる筈がない。少くも俺位よくお前の運命を愛するものはない。お前だつてそれは知つてゐるだらう。

女、（平然と）戀は報酬を要求すべき性質のものではありませんでしたね。しかしよし妾が貴方の愛を充分知つてゐたとしても只それ丈けでは貴方は滿足出來ないんでしやう？

男、出來ないのが當然ぢやないか。

女、（宣告するやうに）何しろ歸する處は一つしかない。其前には凡てのことが水の泡ですもう後五分間の壽命ですよ。貴方がそんな無駄話を妾にしてゐられるのは。



（間）

男、（無理に落付き）又お前は什うせ信用が出來ないと外云ふまいから無駄かとも思ふがどうも氣になるから云はずにはゐられない。一體それを無駄と知りつゝもくどく繰り返へして一つ事を云はずにはゐられないのが敗れたる戀をするものゝ運命だ。先刻俺は會話の調子で態とお前が今後の俺から受けるであらう壓迫の恐怖……と云ふやうなことを云つた。しかし眼の眩んだ俺はお前が何と云つてそれをけなそうとも斷じて誓ふ。俺は決してお前の自由を束縛したり、お前を壓迫するやうなことはしないと云ふことを。それはもう天にかけて誓ふ。何故かと云ふに俺にはお前に對してそんな勇氣も力もないからだ。それにお前は此間も俺が一方非常に温和な優しい心を持つた男だと云ふことをお世辭らしくなく云つてゐたではないか。全く俺は隨分怒りつぽい。併しお前は俺が實は人並外れて平和を愛する男だと云ふことも知つてゐる筈だ。殊に俺にとつてお前との不和は胸をかきむしられるやうに苦しい。

正直な話、俺はお前を怒らせることが此上なく怖わいのだ。それ處ではない、お前の眉の間の八の字すらも充分俺の胸に動悸を打たせるに足るのだ。お前の笑顔を見る時は、それが俺に對する露骨な嘲弄であることが分つてゐる場合にでさへ、俺の胸の中の何處かには必ずある喜んで躍る一寸法師が二三匹はゐるのだ。

男、女の膝の上に突俯し相になる。

女、（男の頭を撫で乍ら面白相に）そんな時は嘸ぞ切なくつて不愉快でしやうね。

男、不愉快と云ふよりは泣き度いやうな心持だ。

女、妾がもう少し人の惡い殘酷な女だつたら何處迄貴方は玩弄物にされるか分らないわね。貴方と妾との場合では何所迄も妾の方が强者なんだから。

男、（頭を擡げ）うむ。單に俺がお前を戀しないと云ふ理由で俺はお前の前には弱者だ。それも一通りならぬ弱者だ。それは生憎お前が普通外れた殘忍な女だつたからだ。



女、で貴方は妾をうんと抑えつけ度がつてゐ乍ら自分が暴君になればそれでもう事が破滅だと云ふことを知つてゐるからそれが怖わさに不滿な奴隷でゐるより外に仕方がないんだわね。可哀相に。

男、可哀相だ。だがお前は俺を奴隷としてなら俺と一緒にゐることに滿足出來るとさへ思つてゐない。それだから困るんだ。

女、（暫くして）いゝことを敎へて上げましやう。かう思つて御覽なさい。妾と云ふ人間は貴方が勝手に空に描いた幻影に過ぎないので、實際にゐる人間ではなかつたと云ふ風に。つまり妾を實在だと思つたのが貴方の間違だつたと云ふ風にね。妾も貴方のことはすつかり忘れて了いますから。

男、なあにお前にだつてさへ決して俺のことを忘れて了へるものぢやない。人間は一寸したつまらないことさへも割りによく覺えてゐるものだ。處で實は俺も弱い人間のやうにある時はそう思ふことに遁げやうかと思はされたこともある。しかしそう

云ふ作爲が永い間の何の慰めになるだらう――まあ、しかしお前は俺がお前の留守の間に什んな風にして一日の時間を費してゐると思ふね。云ふ迄もなく俺は先づお前の行く先の運命に就いて色々のことを考える。そしてお前が萬一俺を捨てた場合お前が俺なしにも本統の幸福を獲られるのには什うしたらいゝかとも考え、又お前の幸福を祈る。それを考えたり祈つたりすることは堪らなく辛いが兎に角考えもし祈りもする。お前は俺がこんなことを云つたとていゝ氣になつては困る。俺は直ぐ吾々二人が畢に固く結び付くことを度重ねて祈る。それから又萬一俺がお前から離れた時其孤獨の淋しさに什うして打ち克つて行くかと云ふことも考える。更に又お前と俺との關係は果して絶望すべきものだらうか。此儘では維持して行けないだらうか。其中にお前が心から俺を愛するやうになる時が來はしないだらうかと云ふことも考える。そう云ふ風にして俺は……

女、（男の辭を遮り）しかしつまる處貴方は自分が一人になつた時の用意をしてゐると云



ふのでしやう。

男、しかしその用意は何の役にも立たないことが分つた。何の慰めにもならない。

女、（少し飽き氣味に）妾も時にはそれと同じやうなことを考えたりするわ。（男、侮蔑的な苦笑を漏らす）えゝそれは丁度貴方に苦笑いされて充分位な程度にですの。しかし要するに何時も同じ結論になるの。

男、だが什うしてもお前には吾々が別れなければならない二人だと思へるのか。どうしてさう思へる。お前は只强ゐてそう思はうとしてゐるのぢやないか。

女、貴方は妾達の不幸が今よりももつと〳〵恐ろしいものになる事が平氣なの？妾達の同棲は最初から間違つてゐたのでした。それなのに妾達二人がぐず〳〵こんな生活を續けて行く間に小供でも出來たら其小供の不幸は又どんなでしやう。其爲れをするものは妾達二人丈けではありません。だから今の中に早く思い切つて別れて了ふ方が誰の爲めにも一番いゝのです。今でさへ實は少し遲過ぎるのですけれど、そ

れは妾がつい貴方に同情した自業自得の運命として諦めますわ。

男、お前は今頃そんな事を云ふが、俺には妻子の運命を背負へる位の自信はもう出來てゐる。小供のことなんぞは、小供が出來た時に始めて考えればいゝことだ。

女、貴方も案外馬鹿ね。そんな事は本當の夫婦の仲でこそ云へることで、妾達のやうな間柄で云へることぢやありません。向ふ見ずと云ふのは貴方のやうな人のことですよ。

（間）

男、（嘆息して）あゝ何だか俺は苦しい夢にでも魘されてゐるやうだ。

女、（嘲笑って）苦しい夢と云ふよりも今迄貴方が見てゐた氣樂な夢が覺めた苦しさでしやう。

男、そうかも知れぬ。

女、しかし妾は今迄貴方に對する間違つた好意や同情の爲めに態々こんなむさ苦しい



牢屋の夢に惱まされてゐました。妾はもう快い眼を覺まさせて貰つてもいゝ時分です。あゝ二週間の牢獄生活。隨分永かつたこと。

男、（慌てやうとして氣を鎭め）まあお待ち。又始まつたと云はずに聞いて呉れ。これは先刻から氣が付いてゐたことだが一體俺達は非常に馬鹿なことに煩はされてゐると思ふ。それは何かと云ふに言葉遣いだ。俺達は口癖のやうにやれ暴君とか、奴隷とか、牢獄とか、囚人とか、掠奪とか、そんな普通の夫婦が餘り遣はない突飛な言葉を濫用し過ぎる。それが爲めに普通の夫婦が煩はされる憂いのない餘計な言葉遣いから生ずる物議や悶着を釀してゐる。馬鹿な話だ。だから之からは一切そんな不穩な言葉を遣はず、從つてそれから來るつまらぬ紛擾のない當り前な夫婦として平和に暮さうぢやないか。

女、（嘲笑って）何もかも今迄の過去を水に流してね。

男、うむそうだ。

女、（圖に乗って）用心なさいよ。そろ〳〵貴方はお目出度くなつて來てゐますからね。一體そんなことは口に出して云はなくつたつて習慣的に胸の中で始終そう思つてゐれば同じことぢやありませんか。

男、いや少しは異ふ。少くも悶着が馬鹿らしく大袈裟に發展しずに濟む。

（間）

女、まあお聞きなさい。貴方が色々な説を苦しい頭を捻くつて根氣よく搾り出す心持には妾同情も出來るの。しかし凡て貴方の云ふことは妾にはもうどれもこれも五十歩百歩にしか響かないんですよ。恰度中心を支へてゐる太い幹柱が折れた爲めに大きな屋根が崩れ落ちやうとしてゐる下へ持つて行つて何本も小さな棒杭を樹てゝ見る位にしかね。

男、（腹立たしく）ぢや俺はも一度頼む。お前は今迄通りにして朝から晩迄此處を明け放しにしてお前の好きな處を勝手に飛び歩つてゐて差支ないから什うか責めて俺と一



緒に住むこと丈けは止さずにゐて呉れることを。俺はお前の云ふなり次第になるよ。全で忠實な番犬のやうに。

女、（笑い乍ら）そら御覽なさい。あんなことを云ふそばから貴方は直ぐもう番犬なんぞと自分で云つてるぢやありませんか。

男、それなら從順な僕として。（癇癪を起し）だが什うして一體お前はそう俺を虐めることが好きなんだ。

女、貴方が嫌いだからよ。

男、何故そう俺が嫌いだ。

女、妾は貴方の顔を見ると、貴方のやうな男に惹かされた自分に腹が立つんですよ。しかし何故貴方はもう好い加減に勝手にしろと云はないの？

男、そんなことを云ふものか。

女、（勝ち誇るやうに）云へないんでしやう。ですが貴方にはそれが誓へる？本當に妾の

僕となることが。

男、(勇んで)勿論。

女、そんなら妾の足にキッスして御覽なさい。

男、女の足許に飛び付き其脛に嚙み付かうとする。女、飛び退く。

女、犬!(鍵を男の前に見せびらかし)何故あんなものゝ中にこんな大切なものを入れておいたんですよ。

男、いきなり手を延ばして其をひったくらうとする。女巧みにそれを引つ込ます。

男、馬鹿!巫山戯た眞似をするな。

男、椅子に腰を卸して俯向きむっつりとしてゐる。(間)

女、(男の側に近寄り、後ろからのぞき込むやうに)和睦しましやうか。

男、矢庭に女に飛びかゝり無理やりに其頰を嚙むやうに接吻する。女怒はず男の横頭をはたく。

男、後すざりする。



女、(惡いことをしたと云ふ風に赤面し乍ら)獸物!

男、惡かつた。俺が謝る。俺は馬鹿だよ。馬鹿だ〳〵。

男、狂い乍ら室の中を歩き廻る。其中に扉の錠を女が外さうとするのに氣が付き扉口へ飛び行く間に合はず。男、慌てゝ女を室の中央に曳きずり寄せる。

男、そんなことをしたつて駄目だ。俺が貴樣を出しはしないから。

女、何と云ふ可厭な人間でしやう、貴方は。

女、可厭な人間さ。しかし仕方がない。そんなことはお前に云はれない先から俺はもう疾ふに自分に呆れてゐるんだ。

(間)

女、(手提げの中から櫛を取り出して少し歪んだ髪をさっと撫で付け乍ら冷やかに)貴方は日外(いつぜや)妾に無頓着は何よりいけない。責めて嫌はれた方が未だましだと云つたことがある。

男、(むっつり)うむ。……それが什うしたと云ふんだ。

女、（櫛を手提げの中に收い乍ら）處が今になつて見ると妾が貴方に無關心であつた頃のことが未だ餘つ程名殘り惜しいでしやうと云ふの。何故かと云つて貴方に取つての妾は妾の冷淡が命だつたのですもの。そして妾が貴方を嫌ふやうになるが否やもうその命は絶えたのですからね。

男、（狂ふやうに）しかし什うしてそんなことになつたのだ。俺には分らぬ。

女、大方妾の方からそう仕向けたからでしやう。しかし貴方は冷淡にされた處から嫌はれる處迄立身したぢやありませんか。

男、だからそれで滿足しろと云ふのか。

女、冷やかに頷く。

男、そんなら什れ程嫌つてもいゝから俺を捨てないで呉れ。俺はかう云ふ風に頭を下げて賴むよ。（男頭を下げる）

女、（誇り氣に笑い）何も貴方の爲めぢやない。妾の爲めにそんなことは出來ないんですよ。

此時下の方で幽かに戸口の鈴鳴る。

女、あゝ來た。もう此れきりだ。

男、誰が來たつて俺は其奴を此室に入れはしない。此室は俺の室だ。そしてお前は俺のものだ。俺の道具だ。

女、（平然と）もう迎へが來ました。

男、（少時くして）差し詰めお前は今夜此れから一體何處へ行く心算なんだ。お前は此處を除いては宿無しぢやないか。

女、（冷笑的に）そんなことは一切心配御無用です。妾は晝間飛び歩いてゐる間を色々な役に立てることが出來ないでしやうか。又妾が何處へ行くかそんなことを貴方に知らせる馬鹿が何處にあるもんですか。

男、一層行くなら千里も遠くへ行け！

女、へむ。有り難ふ。貴方の爲めに態々轉地を企てる位には妾も貴方に拘泥してゐないと濟まないとも思ふわ。しかし妾は矢つ張り此都會の中にうろついてゐるでしやう。何故と云つて妾は貴方の爲めに態と自分を僞つて役者になる義務はないんですからね。そして其間には又何度か貴方に會ふやうなことがあるでしやう。しかしそれが可厭なら一層始終此室から出ずにゐらつしやい。

男、畜生！一體俺に什うしろと云ふんだ。それを敎へて呉れ。えゝ!?

女、(冷然と)自殺でもなさいよ。

男、(皮肉に)うむ。お前を殺してなら俺も死ぬさ。

女、嘘吐き！

此時戸口をコツ〳〵と敲く音す。

女、(喜び)お入り。

體の大きな人の好さ相なDの家の下男、割りに賤しからぬ風にておづ〳〵入り來る。そして男と



女とに叮嚀にお辭儀をする。男、下男を睨み付る。

女、大變遲かつたぢやないか。

下男、へえ。どうも取り込んで居りましたので誠に相濟みません。

女噴き出し相にする。

下男、奥樣金槌(かなづち)を持つて參りましたが。

女、もう用はない。鍵は妾が取り上げて了つたのだから。

男、不快な顏をし乍ら一寸苦笑する。

女、用心がいゝでしよ。貴方が何か云ふと先刻のやうに扉の錠を卸す癖があるからその時には扉を毀はさせやうと思つて金槌迄態々持つて來さしたんですよ。(下男に向い)車の用意は出來てるだらうね。

下男、(畏まり)へえ。出來ております。お荷物は何處に。

女、荷物はもういゝの。そんな事はしてゐられないから。

男、（下男の側に寄り行き何氣なき體にて）え、と。此女の行き先きは何と云ふ處だつけな。

下男、私は存じません。

女、（嘲笑い）妾がそんな手拔かりをしておくもんですか。妾の行き先きは妾より外誰も知つてやしません。

男、そんなら今此から俺が見屆けてやる。俺は何處迄でもお前と一緒に喰つついて行つて離れないからそう思つてゐろ。お前の住む處には俺は屹度住んでやる。（下男に向い恐ろしき見幕にて）貴樣は此處にゐることはならぬ。直ぐ出て行かないと承知しないぞ。さあ歸れ！

下男當惑してゐる。

女、（男に）お默りなさい。此男は貴方の僕ではありません。妾の傭人です。さあ行くとしやう。では左樣なら。貴方。

男、（戸口の處へ飛び行き）誰が行かせるものか。（下男に向い）此女を出してはならぬぞ！



女、（下男に）あの人をしつかり押えてお居で。

下男、男に飛びかゝり抑えやうとする。其隙に女は飛鳥の如く戸口より走り拔ける。男、絶叫し乍ら下男を突き退け其後を追はんとするを戸口の側にて後ろより下男に抱き止めらる。男「オイ待つて呉れ！」と叫ぶ。下男必死となつて男を抱き止める。男遂に下男を振り放し氣狂のやうに女の後を追ふ。下男も亦其後を追ふ。二人の階子段をけたゝましく驅け降りる音、すさまじき風の音に交つて聞こゆ。

幕

——一四、一、七——

# 畫家とその弟子

（四幕劇）

登場人物

廣川信義—畫家

その妻、秀子

その娘、文子

楠本勤—青年畫家

川上弘—文士

モデル。其妻。醫師

其他

時　現代。場所。東京の附近。

## 第一幕

主人、廣田信義の畫室。右手に硝子窓。正面の左隅は襖にて通路になり居る。机、卓子、椅子等方々に多くの額かけあり。午後四時頃。

主人は畫架に向つて百號大の繪を畫いてゐる。畫中の前景には一人のやゝ年老いたる大いなる男、重き荷を背に負ひ、やゝ俯向きになりて杖を突き、山路に登りつゝあり。背景には遠く山の嶺巒へ、その頂きは雲に隱されてゐて見えず。日は山の端に落ちかゝつて左方に低く美しき黐合ひあり。畫は恰度今完成したる處なり。主人のわきに頑丈な體をしたるモデルの男、恰度畫中の人物と同じ姿勢、同じ風裝にて大いなる袋包みを背負ひ、杖を突きて立ち居る。

主人。（畫筆を持ちたる儘立ち上り、二歩ばかり後にすさる）さあ、之れで先づ善い。出來た。

（モデルに）いや、どうも御苦勞だつたね。お蔭げで此畫も漸く立派に仕上げる事が出



來た。まあ、お休み。

モデル。（依然として姿勢をくずさず）もう宜しいのですか。

主人。もう宜しい。畫は此通り出來上つたのだ。さあ、そんなものを下ろして樂にしなさい。樂に。

モデル漸く姿勢をくずして、袋包を下に下ろし、背りかへる。

主人。（いたはるやうに）背中が痛くなつたかね？いや、どうも本當に御苦勞だつた。毎日毎日お前さんには二ヶ月近くも通よつて貰つて、其上こんな重い袋迄背負つて、二時間も三時間もじつと立ち續けてゐて貰つたのだからね。實際容易な事ぢやない。さぞ背中や腰も痛んだだらう。

モデル。いえ、なに。此れ位いの事は全でお易い御用で……。何もせずに只ぽかんと立つてゐてそれでいゝ賃銀を頂いてゐるんですから仲間の者は羨ましがつておりますよ。それも其筈で、私共の仕事から比べれや、これ位の袋を一つや二つ背負つ

たからつて全で休んでゐるのも同じやうなもんで、之でお金迄頂いてゐりやこんな甘い仕事は御座いませんよ。たゞで頂いてゐるやうなもんですからね。

主人。さうでもないだらう。何の興味もない事にじつとして永く同じ姿勢を保つてゐると云ふ事は一體中々樂な事ぢやないし、それに此袋が空ならば未だいゝが、矢張りそれだと本當に重いものを背負つてゐるやうな工合には畫きにくいのでね。……まあ、とにかくお掛け。さうしてゆつくりお休み。茶でも飲んで。（奥に向ひ呼ぶ）おい〳〵。誰か。

奥にて女中の返事する聲聞こゆ。女中登場。

女中。何か御用で。

主人。あゝ、此處へお茶を持つて來て。それから何か菓子でもあつたら一緒に持つて來るやうに。

女中。はい。（退場）



モデル。（恐縮の體にて）先生。ほんとにどうかもうお關いなさらないで。餘り庇つて頂くと何うも勿體ない氣がしまして却つて私が困りますから。

主人。そんな馬鹿な事を云ふもんぢやない。お前さん達は自分等の値打を餘り知らな過ぎて困る。勿體ないなんぞと云ふ事は何もしない怠け者だけが云ふべき事で、立派に働いてゐる人間が無暗に云ふべき言葉ぢやない。其くせ怠け者に限つて勿體ないなんぞと云ふ言葉は遣い道を知らずに、働いてゐる者丈けが無暗にそれを云ふのだ。茶一杯が何でお前さん達に勿體ない。のらくら者丈けに水一杯も勿體ないのだ。

モデル。ですが餘りかうしてゐて頂いてばかりゐますと仲間の者に對して濟まないやうな氣がしますのでね。自分ばかり甘い事をしてゐるやうで。

主人。それもさうだらうが、お前さんはわしとは又特別な因緣が出來たのだからそれはまあ仕方がないと思つて呉れるさ。わしはそれは〳〵今日は嬉しいのだ。こんな嬉しい日と云ふものは近頃にないのだ。さうさな、一寸世界の王さんになつたから

と云つて迚も此のやうな悦びの百分の一も味へる譯のもんぢやない。而もわしがさう云ふ悦びを得る事が出來たと云ふのも半分はお前さんのお蔭げだ。わしは此悦びをお前さんと與にしたいのだ。

女中、茶と菓子とを持つて登場。主人自ら茶を注ぎてモデルに與へ、自らも飲む。女中去る。

主人。さあ、遠慮なくお上り。仕事の後で茶を飲むのは甘いものだ。

主人。(モデルが遠慮をしてゐるぞ)さあ、お上りと云つたらお上り。お前さんは茶は嫌いなのかね。それとも腹でも惡いのか。

モデル。いえ、頂きます。(茶を飲む)

主人。(菓子皿を取りてモデルにすゝむ。)さあ、お摘まみ。わしは餘り遠慮をし過ぎる人には腹が立つのだ。殊に自分の悦びの分け前を拒まれるのは嫌いなのだ。

モデル。では遠慮なく頂戴します。(菓子を一つ取りて喰べる。主人も食べる)

主人。(悦びの餘り立ち上り)あゝ實に愉快だ。(畫の前を往つたり來たりする)何と云つていゝか。



まあとにかくどうだ。えゝ? これならお前さんが永い時間と勞力とをわしに貸し與へて呉れた丈けの甲斐はあるとは思はないかね?。えゝ?

モデル。(困つて)左樣。私には全で分りませんが、何しろ立派なお繪になりました。私のやうなきたない爺が繪に畫かれてこんな立派なお畫が出來るものかと思ふと全く只不思議な氣が致しますよ。何の、私の勞力なんぞと申したつて……たとへそれがもう少し骨の折れる事であつたにしろ、高の知れたもんで、それもほんの只其時丈けの事でムいますが、それで先生のお仕事が出來ませば、それはもう末代の末代迄も立派なお作として遺つて、世界中の人が見て喜ぶ事でムいますもの。此爺奴はもうおつつけ地の下にもぐつて冷たい肥料になるでムんしやうが、此お作の中の私は何百年たつたつて死につこはムいません。さうして立派な美術館とか博物館とかの廣いお室の壁に懸けられることでムいましやう。私にとつては此位名譽な事はムいません。私の女房や近所の者も皆さう云つておりますよ。お前さんは本當に運が

いゝ。あんな立派な先生のお筆にかゝると云ふ事はそれ丈けでももう充分有り難い事なのに其上なほいろ〳〵のものを頂戴迄して餘つ程身に餘る果報だと思はなくちやいけないと申してね。

主人。はゝ。どうかお前さんの云ふやうになつてほしいものとわしも願ふよ。さもないと……

主人の妻、秀子、美しき女、入り來る。

妻。貴方。お手紙が參りました。美術協會から。

モデル、妻に挨拶する。主人、手紙を受けとり開封し、讀む。

主人。（讀み乍ら滿足氣に）ふむ。

妻。（其處へ腰を卸し）何と云つて來まして？

主人。勤（つとむ）は入選したよ。

妻。え、勤が？



主人。此通り入選者の中にあれの名前が入つてゐる。どうかと思つてゐたが。まあ入選したのは惡くはない。あれは入選した位で浮かれるやうな馬鹿ではないから安心だ。

モデル。ではもう御用がなければ私はこれで御免を蒙ります。

主人。さうか。永いこと大きに御苦勞でした。では……（微笑み乍ら、モデルの背負い居たりし袋包を取り）今日はこれを持つて行つてお呉れ。詰らないがらくたをいろ〳〵中に入れておいたから。

モデル。（少し驚き）此袋を……私に……と被仰るのでムいますか。

妻。まあ。

主人。さうだ。別に驚くことはない。少し醉興な送り物のやうだが、わしは人に物をやるのに中實をむき出しに見せ乍らやるのは心苦しいから……受けとる方だつてさうに異いない。かうして袋に隱してあればやる方もやりいゝし、受け取る方も受

けとり易い。何かないかと思つたのだがね、恰度此袋が其處にあつたからこれにしたのさ。まあ紀念だと思つて。

モデル。（辭退して）でも私はもう……

主人。（笑つて）そんなに袋の中のものを買い被らないがいゝ。わしは客だから碌なものをやる氣遣いはないよ。却つてこんなものをやるのはお前さんに對して失敬な位だ。まあ家へ持つて行つてあけて見れば「何だ、こんなものか」と思ふだらうが、

モデル。でもそれはどうか。

主人。持つて行かないと云ふのか。

妻。だつて貴方こんな袋を下げて行つて道で疑はれでもすれば。

主人。そんなら俺の名前を云へばいゝ。俺に貰つて來たと。持つて行つてお呉れ。わしは只で人を使ふ事は出來ない。お前さんがわしに呉れた時間と勞力とに比べればこんなものは實に下らないものだ。お前さんはわしの喜びの分け前を受けとつて呉



れたつてよさ相なものだ。

妻。（モデルに）では貴方。厄介でしやうが持つて行つて下さい。主人は何でも只と云ふ事が大嫌いですし、それに自分の云ひ出した事を人が斷ると直ぐ怒る質ですから。

モデル。左樣ですか。それならば有り難く頂戴して參ることに……

主人。（喜んで）あゝ、どうかさうしてお呉れ。

モデル。有り難ふムいます。どうも重ね〴〵いろ〳〵頂きまして何ともお禮の申し樣もムいません。（妻に）奥樣。有り難ふムいます。ではこれで失禮を致します。

主人。左樣なら。又暇だつたら話しにお出で。

（モデル、禮をし袋を持ちて退場。間。）

妻。貴方。何をおやりになつて？

主人。なあに、下らぬものさ。俺の古い外套だ。それに此處にあつた時計を入れてや

つた。それに金を少し……

妻。少しつてどの位です？

主人。俺の墓口の中に銀貨が四圓ばかりあつた。それを入れてやつた。

妻。まあ、四圓。

主人。さうだ。たつた四圓だ。だがな、今度の此の繪が賣れゝば千圓だぞ。

妻。えゝ、賣れゝばね。でも賣れるでしやうか。

主人。賣れなければ賣れない方がいゝさ。一體俺は自分の作を毎も非賣品にしておき度いのだが、……元と〳〵かう云ふ作品に物質上の價格を附ける抔と云ふ事は途方もない話なのだからな。只それによつて其作品の眞價が汚されないと云ふ丈けの話で。そんな事は畫かきと自稱し乍ら金の奴隷になつてゐる俗物共のすることだ。

妻。それに貴方は時計迄おやりになつたんですつて？

主人。此間俺は彼奴の家の前を通つた。丁度自家の裏畑にある物置小屋位の家なのだ。



すると丁度あれの妻君が出て來て俺のゐるのには氣がつかずに直ぐ隣りの家に行つた。何をするかと思つてゐると時間を訊いてゐるのだ。どうもあれの家には時計はないらしいのだ。しかし家には時計は勘定して見ると四つもある。俺が持つてゐる。お前も持つてゐる。臺所にも一つかゝつてゐる。それから此室の置時計。

妻。それでもあれの家にも時計はあるのかも知れませんわ。そうしてそれが今こはれてゐるか、直しにやつてゐるのかも知れませんわ。

主人。しかしあゝ云ふ職業をしてゐる者には一つ時でも時計は必要に違いない。しかし自家にはさう三つも四つも時計は要らないのだ。一つ位やつたつていゝ。

妻。不腹相に無言でゐる。

主人。それにあの古時計だつて賣れば四圓か五圓にはなるだらう。だが、實はもつといろ〳〵のものを俺は澤山あれに呉れてやり度かつたのだよ。しかし矢張りいざやるとなると詰らぬもの迄が變に惜しくなつて來てな、俺はあれ丈けしかやれなかつ

たのだ。（妻、何か云い度さうにして默つてゐる。）お前は何故そんなにやり度いかと思ふだらう。だがな、俺はあれを畫かうとしてじつとあれの顏や體を視てゐると何とも云へない愛情をあれに對して感じて來るのだよ。じつと見てゐれば見てゐる程だん〳〵強い愛情が俺の胸の中に起つて來るのだ。一體何だつてさうだ。一寸見たのでは愛情が湧きにくいものでも、じつと見てゐると變に其物が親しく可愛く、美しく見へて來るものだ。人物にしろ、景色にしろ、靜物にしろだ。さうして其時だ。俺が最も善い人間であるのは。

妻。（冷淡に）えゝ、貴方はよく其事を被仰るわね。

主人。昨日なんぞもさうだつたが、俺はあれを見て畫き乍ら、よくあれに對するの愛の爲めに私かに涙ぐんだ程だ。さうなつて來るとあれの汚れた手から、足から、耳・から、襟の垢から、埃のたまつた頭の髪や爪迄が一つ〳〵可愛くてならなくなるのだ。さうして俺はあれに俺の持つてゐるものをあれもこれもやつて了い度くなるの



だ。

妻。貴方のやうな畫かきに描かれるものは幸ね。でも餘り人に物をどし〳〵おやりになるのは考えものですわ。何故と云つて人に物をやるにしてもさう誰にも彼にも與れてやると云ふ譯には行きませんからね。それに無暗にさう云ふ評判を立てられても、又さう云ふ癖がつかれても困りますわ。

主人。それは物質上の行爲にはそれが元とはどんな善い動機から出た事にしろ弊害が伴ふ事は有り勝ちな事だ。しかしそれは少し事柄か大袈裟な場合だ。俺が今あれに與れてやつたもの抔はそんな弊害が起るにしては餘りに小さ過ぎるものだ。それに對して心配をするのは滑稽だ。俺はその爲めに自分が困るやうなものは何一つやりはしなかつたのだからな。

妻。（不興氣にわきを振り向き、自然と繪を見る。）もう此繪はお出來になつたのですか。

主人。さうだ。此通りやつと今仕上つた處だ。お前もそれに對してちつとは喜んでも

いゝ筈だと思ふがな。

妻。それは喜びますわ。こんな立派なお繪がお出來になつたのですもの。ほんとによく出來ましたことね。

主人。お前にとつてはかたきのやうに邪魔なものが一つ片付いた譯だからな。

妻。まあ、かたきのやうに邪魔なものですつて？妾は唯此繪をお描きになる爲めに貴方のお體がめつきりお痩せになるのがわきからも眼立つ程でしたからそれを心配してゐた丈けですわ。

主人。一體仕事をして痩せない位なら仕事をしたとは云へない筈さ。だがな、俺もこれで漸と一つ荷を卸したやうな氣はするよ。何しろ俺も此畫には隨分骨を折つたからな。

妻。ほんとに。でも展覽會に間に合つてよござんしたわね。

主人。俺も何うかと思つてゐたが、案外に早く出來たのはよかつた。俺は此畫が彌か



上に善く出來る事を祈り、お前は又此仕事が一日も早く畢る事を望んだ。それが兩方共先づ望み通りに行つたのだからな。

妻。ほんとにこれなら何處へ出したつて決してひけを取る氣遣いはありませんわね。

主人。何しろ俺は今日は實に愉快でならないよ。生命の悦びと誇りとが丁度二十代の昔に若返つたやうに俺の中に湧き立ち返へつて外へ溢れ出やうとして仕方がない。表へ出て道で逢ふ人逢ふ人を掴まへて一々俺は今日あの作を仕上げたと吹聽して歩き度いやうな氣さへする。此畫を見て未だ惡く云ふやうな奴は……。ふむ、しかしそんな事を云ふ必要はない。此畫がどれ丈けの眞價を持つてゐるものかと云ふ事は何れ解ることだ。（腕を組んで彼方此方歩く。再び繪の前に來て立ち止まり）どうだ。此男の顔丈に、力强い事は。これならどんな嶮しい高い山の絶頂迄でも登れ相だとは思はないか。

妻。それや貴方の貴い血を吸つて、肉を喰べたのですもの。强くなくちやなりません

わ。

主人。さうだ。此男がこんなに力强く、逞しい者になればなる程俺の肉は減つて體は痩せ衰へた。しかし俺は此男の體の中に自分の健康を感じてゐたから少しも弱りはしなかつた。此男と同じやうに俺は年を取り、疲れてはゐても元氣で、力がある。

(間)それはさうと勤は未だ歸つて來ないか。

妻。未だでしよ。何れ歸つて來たら直ぐ此處へ來るでしやうから。少し片附けませうか。

主人。さうか。では少し片附けておくれ。筆は俺が洗ふから。

妻。(繪の具箱を仕末し乍ら)勤は嘸ぞ喜ぶでしやうね。入選した事を聞いたら。

主人。それは喜ぶのが當り前だ。自分丈けの自信は相當にあつても未だ外からの評價が全で分らない中は自分の自信丈けでは何となく物足りなくもあり淋しくもあるのだ。殊に勤なんぞの時代にはたとへそれがどんな風なものでもとにかく世間が自分



の仕事に對してどう云ふ見方をしてゐるか、何と云つてゐるかを熱心に知り度がるものだ。其の批評に對して此方が又どんな風に反響するかは全く別問題だが、それに對して無頓着であると云ふ事は僞だ。むしろ自分の仕事に熱心であればある程、それに對する外部の聲も氣になるのが當り前だ。しかしそんな事は少し確乎してゐる者には何の差支もない許りでなく、却つて益になるのだ。

妻。でも勤のやうに若くつてあゝ云ふ有名な人達の展覽會に入選すると云ふ事は一方から云へばあれの爲めに誘惑にもなりますわね。

主人。そんな事に誘惑されるやうな人間なら誘惑されるのがいゝのだ。だが勤は大丈夫だ。あれにとつてあの會に入選すると云ふ事は少しも過ぎた名譽な事ではない。隨分下らない奴が多勢入つてゐるのだからな。あゝ云ふ奴は何方にしろ外部との反響によつて益々自分の自信を明かにし、そして、より明かに眞の自分を自覺して正しい道を進んで行くのだ。未だ恐ろしいとは思はないが、とにかく彼奴は有望な奴だ

よ。（雙を取り、洗ひ、拭く）

妻。でも今度あれが入選した事は全く貴方のお蔭ですわね。貴方が審査員におなりにならなかつたらあれは無論入選は出來なかつたでしやうに。

主人。それはさうだ。俺も今度のが普通の展覽會ならあれ程熱心にあれの爲めに斡旋する氣も起らなかつたのだが、何にしろ、今度はDが和蘭から遙々來るのだからな。こんな事は日本にとつては實に千載の一遇とも云ふべき光榮な事なのだから其歡迎旁々開く恥しい展覽會には少しでも善いと認め得るものを出してやり度いからな。

妻。それにしても貴方は隨分迷惑でしたわね。あれを入選させる爲めには。

主人。俺が迷惑なら、あれも迷惑さ。何故と云つてあれの畫は今迄俺の單なる模倣のやうに思はれて全で認められてゐなかつたし、それに第一俺の繪と云ふものが元來畫かき仲間には喜ばれてゐないのだからね。だが流石に俺に向つては露骨に矢を引く事を遠慮してゐる者が、俺の後繼者と目ざされてゐる者にはたゝるのだ。それに



あれの爲めに働くには俺は一番都合の惡い位置に立つてゐるのでな。

妻。さうですわ。あの勤が他の者でなくて、貴方の一番近いお弟子と云ふやうなものになつてゐる丈け、猶ほそれはやり惡ふござんすわ。貴方がそんな事をなされば屹度不正な愛顧贔負のやうに思ふものも少なくはないでしやう。殊に常々貴方に厚意のない人達は。

主人。一體自分の未方を庇ふと云ふ事は善かれ惡かれやり惡い事さ。實はそれが不正でない事が分つてゐても庇ふ者に對しては人は矢張りそれを不正な黨派根性か我田引水のやうに思ひ度がるものだからな。

妻。そして中には貴方が少し身勝手をしてゐるやうに思ふ者もあるでしやう。

主人。だから俺は惡く云はれるのは覺悟の前だつたさ。だが、確かに善い事を認めてゐ乍らそれが自分と親しい關係があるからと云ふ位で態とそれをけなすやうなケチな眞似は少くもかう云ふ場合には俺はしない。俺は何處迄も公明に善いものゝ味方

をする位の勇氣と誠さは持つてゐる。

妻。勤も幸ですわね。貴方のやうな有力な味方を持つて。あれは餘つ程有り難く思はなくつちやなりませんわ。

主人。そんな事は何方にしろ何れ小さな事さ。だがもしそんな事があれの幸だとしたら、それは又あれの損でもあるのだから差し引勘定をすればゼロになる譯さ。(筆を拭き畢り、時計を見る)それはさうと俺はこれから又一寸協會に行つて來なければならぬ。

妻。ではお風呂にはお歸りになつてからお入りになりますか。

主人。何、風呂？　風呂は昨日もあつたぢやないか。

妻。でも此頃のやうに寒い時には毎日あつたつて體の工合にようムんすわ。溫まつて血の循環がよくなつて。貴方もお風呂はお好きぢやありませんか。

主人。だが毎日立てる必要はないよ。お前達は體を可愛がり過ぎる事が却つて體を惡くする事を知らないのだ。俺は今日は入らない。



妻。でも協會は既うひけてはゐないでしやうか。もうかれこれ五時ですわ。

主人。ひけてゐたら散歩をして來るさ。俺は午過ぎから今迄ずつと此室にばかり引つ籠つてゐたのだからな。人間は四時間以上も一つ處にじつとしてゐると少しは異つた場所へ動き度くなるものだ。外の空氣でも少し吸つて來ないと頭がくさ〳〵する。腹の工合も惡い。

妻。そんなら外套(トンビ)を被ていらしつて下さいよ。又お風邪でもお引きになるといけませんから。そしてなるべく晩の御飯前に歸つていらつしやいましね。今夜は貴方のお好きな蠣がありますから。

主人。ふん、俺の好きな蠣か。よし〳〵。送らなくてもいゝ。

主人、出て行く。妻。繪の道具を片付け畢り、それを柵にのせ、それより窓の處に行き下を見る無言にて夫の行方を見送る。

娘文子登場。

娘。阿母様。あの、阿父様は？

妻。（娘の方を振り返へり、娘の美しさに感心したる如く）まあ、お前大さう……早かつたぢやないか。

娘。さうお？　妾は又大變阿父様のお嫌いな長湯をして了つた氣がして急いで此處へ來ましたの。阿父様は何處かへお出掛けになりましたの？

妻。なに、又一寸協會迄行らしつたのだよ。阿父様は今度Dが來ると云ふので全で夢中になつてゐらつしやるのだからね（娘、頷いて母のわきに座す）さうして協會の人達がわりに其事に冷淡でゐる事を酷く腹立てゝゐらつしやるのだよ。

娘。まあ、此寒いのに。

妻。あゝ、妾が是非外套（トンビ）を被て行らつしやるやうにと云つたのに態々それも被ずにだよ。妾は今餘つ程外套を持つてあの方を追つかけやうかと思つたのだけれど、又餘り執拗くするやうに思はれるとあの方はお怒りになるからね。ほんとにあの方の不



養生にも困つて了ふよ。こんな廣い部屋に火の氣一つなしでゐらつしやるのだからね。

娘。ほんとに此室には火がありませんのね。妾は體が温まつてゐるもんで氣がつかずにゐましたが。

妻。だからさ。妾が先刻火を入れやうとすると、最う火が必要な陽氣でもないぢやないか。さう俺を早く年寄りの仲間に入れ度がつて呉れるなよつて被仰るのだよ。誰が年寄りの仲間になんぞ入れ度がるもんかね。お前。

娘。（笑ふ）ほんとに阿父様は頑固ね。

妻。頑固なのもいゝけれど、體の事を餘りお關いにならないのも困るよ。「病氣と云ふものは體の事ばかり心配してゐるものゝ馬鹿を罰する爲めにその隙を狙つて入るのだ。體の事を忘れて働いてゐる者には病氣は中々取つつくもんぢやない。」とあの方は口癖のやうに被仰るけれどさうも行かないからね。それやあの方が元と〳〵あの

モデルの爺さんのやうに頑丈な體をしてゐらつしやるのなら妾達だつてさう心配はしないのだけれど。

娘。阿母樣、さう被仰ればいゝぢやありませんか。ほんとに阿父樣がもし大病にでもおなりになつたら妾どうしましやう。

妻。妾が始終其事をうるさい程云はずにゐるとお前は思つてゐるのかい？　だから妾が餘り無理をなさつてはいけません。貴方が近頃お窶れになつてお見掛けが惡いと云ふ事は誰でも云ふ事ですから、貴方は少し御自分の體の力不相應にお努めになり過ぎますよ、つて云ふと、お前がさう云つて呉れるのは嬉しいが、女には少し氣違いじみて精を出し過ぎる位に見へる男でやつと少しは人並みに働いてゐる男だと云ふ事が云へるのだ。人並みに働いてゐると女から思はれるやうな男では、まあ全で働かない、のらくらの穀潰しと同じなのだ。とかうなのだもの。

娘。まあ、隨分酷い事を被仰るのね。でも阿父樣はよく冗談のやうに笑い乍ら眞面目



な事を被仰る事があるかと思ふと、又眞面目な顔をして冗談を被仰つたりするから何ですか分らないわ。

妻。（少し不腹相に）お前はさう云ふけれどもね、あの方が一寸でもそんな冗談を漏らしたりなさるのは近來ではもうお前に向つて位いのものだよ。お前がゐなからうものならお父樣はそれこそもう夜も日も明けないのだからね。妾なんぞと來ちやあお前のお相伴でゞもなけれや朝から晩迄あの方の煙つたいお顔しか外には見る事は出來ないのだからね。

娘。（困つて）まさか。だつて阿父樣はあんな優しい方ですわ。

妻。妾は何もあの方が優しくないなんて云いはしないよ。それや何しろ女中の前だと食べ物が違ふと云ふので落ちついて御飯が喉に通らないと云ふ位の方だからね。しかしまあ、あの方の中に少しでも未だそんな冗談を云つたりするものが殘つてゐると云ふ事は妾達にとつては頼もしい事さ。（何か思ひついたやうに）それはそうと妾はお

前に何か頼み度い事があつたつけ。何だつたらう。（考えて）おゝさうだ。（立ち上り）お前一寸手を貸してお呉れな。

娘。なあに、阿母様。

妻、卓子の上に載せありし一束の絲を持ち來る。

妻。さあ、妾が捲くからお前其方で一寸かけて頂戴。

娘、妻と差し向ひになりて兩手を差し出し絲をかける。妻は話し乍ら絲を捲く。

妻。（少し硬くなりたる調子にて）ねえ、文子。

娘。へえ？

妻。妾はね、一寸お前に訊き度いと思ふ事があるのだよ。

娘。（同じやうに少し硬くなり）なあに。阿母様。

妻。（少し困りて）いえ、別に訊き度いと云つたつて、さう改まつて訊くと云ふ譯ぢやないけどね、あの川上さんね。



娘。えゝ。

妻。あの方の阿父様が此間中から御病氣だと云ふことはお前も知つてゐるだろ。

娘。えゝ。

妻。そして近頃は又少し餘計にお惡いんだ相だよ。何しろあの方はもう七十を越してゐらつしやるのだし……。

娘。阿母様、此處は少し暗ござんすわ。灯りを點けましやうか。

妻。未だいゝぢやないか。窓のわきに行きましやう。彼處は少しは明るいから。

二人窓の側に到り、前のやうに絲を捲く。

娘。それで何うしましたの。阿母様。

妻。そしてあの伯爵のお子さんと云へばあの川上さんお一人なのだからね。あの川上さんがどうせ後をお取りになるのだけれど……。

娘。さうね。

妻。お前もつとちやんと引張つてゐてお呉れな。たるんで了つて捲きにくいから。ね
それで……もう此處迄云へばお前には想像がついてゐるだらうけれど。
娘。（やゝ赤面して）なあに、阿母様。
妻。（微笑む）つまりあの伯爵はあの方の身の上を早く定めてから安心して死に度いと思
つてゐらつしやるのだよ。
娘。さうお。
妻。さうしてあの川上さんは……お前はそれを知つてゐないとは妾は思はないがね、
つまりお前を欲しがつておゐでなのだよ。
娘。……。
妻。そして川上さんはその事をあの方の阿父様に打ち開けなすつたのだよ。
娘。まあ。
妻。そしてあの伯爵はそれをあの方にお許しになつたのだよ。實は何時此事を云い出



して來るかと妾は先から思つてはゐたのだがね、とう〳〵それを訊いて來たのだよ
もし此方の都合さへよければと云つてね。
娘。まあ。そんな事を……。妾ちつとも知りませんでしたわ。
妻。それはお前が知つてゐる筈はないさ。しかしこれはどうせお前と直かに相談して
見なければならない事だからね。いくら親だからと云つて妾達が勝手に定める事は
出來ない事だからね。
娘。阿父様は何と云つてゐらつしやいますの。
妻。實は今も妾は其事を阿父様ともう一遍よく御相談して見やうと思つてゐたのだけ
れどね。何しろお父様は御自分の仕事の事や何かで夢中になつてゐらつしやる處だ
つたし、それに一體阿父様はあの伯爵が元とからお嫌いなのだからね。
娘。えゝ、でも何しろあの伯爵は元とは軍人なのですものね。自家の阿父様がお嫌い
になると云ふよりも馬鹿になさるのは當り前ですわ。

妻。つまりお派が合はないのだよ。其故でもないだらうが阿父様はあの息子さんも何となく好いてゐらつしやらないけれども、これは一體親同士の問題ではなくつて當人同士の問題だからね。

娘。……。

妻。しかし妾には何故阿父様があの川上さん……つまり息子さんの方を餘りお好きにならないかゝ妾には分らないのだよ。それやあの伯爵はあんな人だから阿父様がお氣に入らないのは分るけれど、あの息子さんの方はよく物事の解つてゐる頭のいゝ人でもあるし、それに文學だとは云つても矢張り同じ藝術家ではあるし、それもにやけた薄つぺらな、道樂文士でゞもあるなら別だけれど、人間も眞面目で、確乎りしておゐでだし、それに阿父様を尊敬してゐるのだからね、惡い筈はないと妾は思ふのだよ。

娘。でも阿父様はあれは善い奴は善い奴なのかも知れないがどうも秘密があり相で信



用が出來ないと勤さんに被仰つてゐらしつた事がありますわ。

妻。まあ、お前のゐる處でかい？　そんな事を。それはあの方は勤なんかとは違つて才子だから自然如才なく見へる處はあるさ。けれどもね、又自家の阿父様見たやうに頑固な方も少いからね。阿父様から見れば大抵な人間は如才なく見へて了ふ事は仕方がないよ。しかし……あゝ、有り難ふ。（絲を捲き畢り、手の中で玩具にしてゐる）しかし才があると云ふ事は惡い事ではないし、その爲めに輕薄になるのでなければむしろいゝ事だど妾は思ふからね。それにあの方なら親切でもあり、學問もあり、どの點から云つたつて申し分はない人だと妾は思ふのだかね。阿父様は急ぐ事はないと被仰るけれどあんな人はさうざらにゐる譯のもんぢやないからね。うかつに逃がして了ふのは惜しいと妾は思ふのだよ。

娘。（手持無沙汰に）妾も急ぐ事はないと思いますわ。

妻。それや、妾だつて何も急ぎ度くはないさ。しかし先方では急いでゐるのだからね。

何も結婚は急ぎはしない。たゞなるべく早く話を決めておき度いからと云ふのだよ。それやお前がかうとかあゝとか云へば阿父様だつてそれに反對なさると思はないからね。早い話がお前次第なのだよ。お前が定めて呉れゝば阿父様だつて自然に定まるのだからね。

沈默。此時、外より、づしん〳〵と云ふ跫音聞こえ、勤登場。元氣よき青年。油繪の道具を肩よりかけ、右手に一枚の畫を持ち左手に三脚を持ちゐる。

勤。只今。

娘。(喜びに溢れ)あら、勤さん。

妻。(不快氣に輕く)お歸り。

勤。(道具や畫を隅において此方へ來る)友達の處に寄つたもので遲くなりました。先生は?

娘。今一寸協會迄お出掛けになつたのよ。(立ち上り勤を頭の上より、足の爪先き迄眺め入り乍ら)まあ勤さん、泥だらけになつてどうでしやう。(笑ふ)



妻。おや〳〵。

勤。今日うつかり土手の處で滑り落ちたもんで下のぬかるみに足を突つ込んだんです

妻。(獨り言を云ふ如く)景色にばかり氣を取られて足許がお留守になつてゐるからね。

娘。でも怪我はなさらなかつて?

勤。怪我なんぞするもんですか。(主人の畫きたる繪の前に行き、見る)お、もうお出來になつたんですか。今日の月日と先生のお名前が描いてありますね。

妻。えゝ、先刻お仕上げになつたのだよ。

娘。灯りを點けましやうね。(電燈をつける)妾も知りませんでしたわ。今日お仕上げになつたと云ふ事は。まあ、立派なお繪になりました事ね。

勤、默つて、熱心に近寄り詳細に視入つてゐる。

娘。額縁に入れたら又ずつと引き立ちますわね。

勤。さうですね。(異樣に微笑み、急に又顏を顰める)

娘。勤さんも畫いていらしつたの？　拜見な。

勤。未だ出來上るには二三日かゝるのですけれど……（自分の畫を取りて持ち來る）今度のはわりに自信があるのです。早く先生に見せ度いと思つて急いで歸つて來る心算だつたんですけれど、友達の處でわりに手間がとれたもんで。（半分以上出來上つてゐる十二號許りの風景畫を、主人の大作の下に畫架に凭せかけおく）

娘。まあ、いゝ繪ですわね。阿母樣。

妻。妾には畫のよし惡しは全で解らないけれど。

娘。それや妾には猶は解りませんわ。只いゝ感じがする丈けですわ。それでも矢張りやうな景色だ、此處を油繪に畫いたら嘸ぞいゝだらうと思ふやうな處とは違いますわね。今度勤さんが畫きに行らつしやる時妾も一緒に行つて見度いわ。一緒に行つて見てはいけなくつて？



勤。（少し困つて）それや構いませんが……。

妻。まあ、お前は大さう熱心なんだね。

娘。何時だつたか妾が未だ小さい時阿父樣が寫生に行くから一緒に連れてつてやると被仰つて、喜んでついて行つた事がありますの。それは春でしたわ。妾達は田舍を通つて野原に出ました。何とも云へない芳い香いのするそよ風が吹いてそれは〳〵長閑で靜かな景色でしたの。阿父樣は三脚に腰をおかけになつて早速お畫き始めになりましたの。すると阿父樣は妾に向つて「おい、文子、文子、彼處に珍らしい花がある。あれを取つて來て御覽」と被仰るから妾は喜んで草の中に飛んで行つて、此花？　あの花？　と訊きますと阿父樣は「もつと先きだ〳〵」と被仰るの。どの花だか妾には薩張り分らずに彼方此方探し廻つて手ぶらで歸つて來て、「阿父樣、何處にもそんな花はなくつてよ。」と云ふと「ない筈はない。其證據には此通りちやんと此處に畫いてある。」と云つて畫の中の妾をお指しになつたの。妾は驚いて「まあ、阿父樣は

ずるいのね。」と云いますと、阿父様はお笑いになつて「世の中にお前のやうに美しい花があるものか。」と被仰つたわ。さうして「今日はお前のお蔭げで何時になくいゝ寫生が出來た。」と被仰つてお喜びになつたわ。

勤。あゝ、その繪は僕も知つてゐます。好きな繪です。しかしあの女の子が貴方だとは全で思はなかつた。あれが貴方なんですか。

娘。(微笑む)えゝ、さうなのよ。でも誰もあれを見て直ぐ妾だと分るものはありませんわ。

勤。さうか。あの畫は未だありますか。

妻。あれはね、もう人にやつて了つたから自家にはありません。

娘。まあ、誰におやりになつて?

妻。あの川上さんにだよ。

勤。あの川上君にですか。

妻。あゝ。



勤。それは何時です。

妻。半月許り前だつたよ。

娘。まあ、でもあれは阿父様が非賣品にして誰にもやらずに取つておゝきになつた筈ですわ。

妻。だから賣つたのではないよ。上げたのだよ。

勤。どうしてそんな事を……。

妻。どうしてと云つてあの方が是非ほしいと被仰つたからさ。

娘。阿父様がお上げになつたの。

勤。(娘と同時に訊く)あれが文ちやんだと云ふことを川上君は知つてゐたのですか。

妻。まあ、お前達は全で妾が何か惡い事でもしたかのやうに喰つてかゝるんだね。さう一どきに訊ねられては妾も困るぢやないか。さうさ。あれを阿父様はあの人に上げになつたのだよ。妾は同じ事なら賣らうぢやありませんか、川上さんは買い度